
TWIST ~ キミと歩く道 ~

kazuha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TWIST〜キミと歩く道〜

【Nコード】

N4149G

【作者名】

kazuha

【あらすじ】

事情により転々と転校を繰り返す秀二と父。そして次に訪れた田舎もまた前と同じ学校環境だった。しかし一つだけ違うものがあった。それと出逢ったせいで、生活は大きく変わってゆく…

前編

「秀二、もう少しで着くぞ」

僕らは移動している。これから行く、引越し先へ。

父の声で起こされた僕は眠い目を手でこする。

「後どのくらいで着くの？」

「そうだな…三十分くらいかな」

すっかり深い眠りについていたようで、起きた時には景色もがらんと変わっていた。

街のトンネルを抜けたら、そこは緑が囲む大自然が待ち受けていた。木々が次々と横切り、森林浴を通った光が車中に差し込んでいた。

目を見張った。初めて見る、目の前の大自然が珍しかった。間近で見る自然を堪能し、興味も興奮も抑え切れないほど、とても不思議な心地でたまらなくなっていた。やはり都会と田舎では、これほど別世界のように感じるのか。

窓を開けて空気の違いを感じた。粹で自然と体を取り込まれるようだった。心地のよい風のベッドに乘せられて、まるで雲に乗り南へと移動しているようだった。肌が敏感に風を感じ、その空気を感じ、澄んだ脈絡さえも見えた。

期待と不安を立ちこめた感情を閉じ込めて、僕は窓の外を眺めていた。

車は走る。景色は変わり、多分この辺りが中心的町なのだろう。

杉並に沿って通りに並ぶ商店には活気にあふれ、人々が行き通っていた。

「あれ。ここ一方通行か」

通り特有の一方通行に、道に迷ってしまい、時間を費やした。

その通りから離れたところに小さな通りがあったが、その商店は活気がなかった。休みの日だというのに開いている店が少ない。

だがそれらもすべてが初めてだった。この商店というものも初めてで、八百屋も初めて見た。豆腐屋も初めて見た。

「そろそろだよ。ほら、あのマンション」

商店街から住宅地へ。そんなにも高くないマンションが天に向かって背伸びをしていた。そしてその上から見下ろす空は都会で見るよりも寛大で、広く遠くにそれが永遠に、高くすけるように青かった。

狭い道に入り曲がりくねり、狭い駐車場に入る。

見上げれば遠くで見たよりも、まるで天にそびえる塔。まだ自身が小さいせいもあるため、見上げるだけで後ろに倒れそうだった。

「業者さんはまだだな。早く着きすぎだな……」

僕らが住む部屋は最上階にある。僕らは部屋に向かった。

まだ何もない。まだ新居なので太陽に照らされた部屋はまばゆく鏡のように我が身が映し出された。

そして僕はそのつるつるとしたフロアを走り抜け、真っ先にベランダへ向かった。

僕はそこで、大きな白い山が浮かんでいるのを見た。空の青は爽快であり、水に映る顔は自分を映し出し、まるで心が洗われるようだ。ただ自然の空は見たことがなかった。煙や濁った大気を通して見たことがあるだけだった。見つめたその先にはまだ続きがある奥が見えるようで見えない。果てしなく続く先の見えない遠く高く、僕らが住んでいた空があるのだろうか。同じ空だとは思えない。

「いい眺めだなあ」

僕の後ろに父がいた。

確かにそこからは空だけではなく、町も一望できる。人が動き、車が狭い道に入るのが見え、町を越えたちょうど向こうの空の下に萌えたように見える山々が壮観だった。すばらしい観覧場だった。

僕は景色に圧倒されていた。

「あ、業者さん」

このベランダの下。一台のトラックがマンションの駐車場に入っ

て来たのが見えた。

「ほら、行くぞ」

父に肩を押され、まだ足跡さえも残さずに家を出た。

業者は帰り、引越しの準備はもう終わるだろうというところで僕と父は夕食にしようと近くのコンビニでインスタント食品を買った。そしてこの家では初めてのご飯となり、初めての夜が迫る。

父は湯を沸かしてラーメンを作っていた。やかんがピーっと鳴る。テレビはもう見える。だが床に直に座っているので骨が砕けそうな気持ちであった。だから寝転んで地べたに這いつくばり、テレビは見ずに聞いていただけであった。

いつもなら外から車の音は耐えなかった。そして窓の外からあふれる光。昼間とさほど変わらない生活。しかしこの閑静な住宅街はなんだろうか。いつも騒音を耳にしているようだったので逆に物寂しいほどの静寂に気付いてしまう。珍しかった。それに外は暗く、空は昼間とは違う、真逆の暗さ。すると時々一つか二つ、光瞬いているものが見えるのである。

父はキッチンから湯気が立ったラーメンを持ってきた。そして硬い床の上に座ってそのまだ半茹での麺を噛みちぎる。

そして先に食べ終わった父は箸をおき言った。

「今日はもう遅いし、続きは明日な」

僕はもう疲れていた。それを聞けてよかったのだが、また明日と引き延ばし明日またこの作業の続きをすることは憂鬱でたまらない。僕にはこの他に疲れていてもしたいことがあった。せつかくこの町に引越したのだから、どうしても散策を試みたかった。

僕がそわそわしているのを父は察していた。

「終わったら、外にでも行くか。たぶん、昼までに終わるだろうから」

当然のように僕はうなずいた。

食器を片付け、今日は疲れたのもう寝ることにした。風呂に入

り、歯磨きをして、父にお休みと言い、すでにベッドのみは整えてある僕の部屋に入った。ほかに勉強机、部屋の隅に積み上げられているダンボールの箱。今はまだとても広い部屋に感じるが、明日になったらこれらが片付けられ、瞬く間に狭くなるのだろうが。

今だけこの自分だけの優越感を味わいながら、部屋の電気を消して布団に入る。

カーテンの向こう。そこには光さえも飛び込まない。マンションの最上階。そこは他とは遠く隔絶された空間にさえ思える。差し込む光は街頭のぼんやりとした光がやっと届く程度だ。それにカーテンの間から見える景色。ちらつと見えた瞬く星。大きな闇の底に沈む光に照らされた星は、まるでブランコに揺らされながら眺めているようだった。

ドアの向こうから聞こえるテレビの音。冷蔵庫の低周波。耳に触れる空気。時々窓をたたく風。車の行き交う交差点。遠くの山から聞こえてくる自然の息吹。

ここに来て、ここにいる、ここで寝て、初めての衝撃ばかりだった。都会なんかより、はるかに田舎のほうがいい。それは何が違うもので僕にそう思わせた理由さえ考えなくても頭に浮かぶ。

また明日片付けだと鬱に思いながらも、いつの間にかその後の外出のことが頭の中を埋め尽くしていく。それに埋もれるように、僕は夢の中へと落ちていった。

町の商店街に出てみると、車上で見た時よりも風景は違って見えた。一歩ごとにこの土地の歴史が理解できるようで、ただ単純にこの町を知れた。まるで地面深く、昔から存在していたこの土地本来の生気さえ感じる。

僕は商店街を歩き、町一番のデパートを見て、人の少ない昭和から残っているのだろうかと思わせる建物の横を歩き、そして空が広く、気持ちよい風が抜ける公園に入った。

近くのベンチに座り、僕は歩き疲れてすっかりお腹がすいていた。

そんな時、僕の目にコロッケの屋台が見えた。僕はそれを見ていた。すると父は僕の表情でそんなことさえ分かるのだろう。

「ほら、買って来い」

お金を渡され、僕は意気揚々に屋台に向かって駆け出した。

もちろん父の分も忘れない。正景におつりとコロッケを渡して、僕らはそのコロッケを食べた。よほどお腹がすいていたのだろう。僕はそれをいともたやすく食べ終えた。

ベンチに寄りかかり、中央の噴水を見る。複数の家族が公園で一週間の労をねぎらっていた。

僕はその家族らを見ていて、うらやましくなった。僕には母がない。父が言うには僕が幼い頃に病死したと言う。だが母と写った写真はないし、家族そろって写った写真などもない。だから僕はうらやましかった。そのあまりにも普通すぎる情景が、平和の象徴にさえ思え、美しくも感じた。美德の言葉が似合う。

「どうしたんだ、浮かない顔して」

父は僕の横顔に気付いた。自分でもそんな顔を作り、ため息までしていた自分によく気付いた。

「いや、母さんって、どんな人だったのかわかって」

生まれてから見たことがない母の面影が自分には鮮明に想像ができ、だが父からの情報はいまだない。だから性格や格好は想像のみで、ただ理想の母としかなかった。優しく、美しく、誰もが望む理想だった。

父はその平穏な顔立ちから急に険しい顔になって、僕から目をそらした。

「…そうか」

母の話題を僕が望むと、父は口をつぐむ。まるでそれをしてはいけない。触れてはいけない。父は常に母の話を拒む。思い出したくないのだろうか。たぶん、辛かったのだろう。なにせ父と母の写った写真さえもないのだから。

だが父はなぜそこまで母のことを思い出したくないのか。それが

知りたい。母が病死で死んだというなら、口惜しむほど悔しいはずだ。それならば母についての一つや二つは口からこぼれてしまうだろう。しかし父は意識して言おうとはしていなかった。

ただ時間が過ぎて、嫌な空気をわざわざ呼び寄せてしまった。コロッケ屋の店員は快活にコロッケを売りさばいていた。すぐそこにいる家族の子供たちが遊び騒ぐ声がここまで届くのに時間がかかった。

この公園は平日誰もいないのに、休日に家族連れが多く訪れる。

遊具もないし広場もないし、ただ噴水とベンチがある憩いの場であった。とうていサッカーや野球などはできない。せいぜい鬼ごっこぐらいだろう。それで休みの日は家族連れが来ることを見込んでコロッケを売りに来る売店が現れる。

小鳥のさえずりが聞こえ、雲が太陽を横切る頃、正景は言う。

「そろそろ帰るか」

まだ日は高かった。この公園を帰る家族なんていなかった。しかし僕もうなずいた。ここにいてもしょうがないし、それに早くここから逃げたかった。父もまた同じ心理にあったのだろう。

僕はただ父の影を追っただけでよかった。そうすれば家にいつか着く。そして途中で自分の部屋に入って、今日はなるべく父と顔を合わせないようにしよう。

並ぶ桜の木、舞い散り僕は知ることさえ許されない。父の横顔が時々見ることができる不穏な雰囲気は消し去ることはない。父の頬に桜の花びらが貼りついた。

その時はすでに、何もかもが都会に戻ってしまったようだった。

「明日から学校だな…大丈夫か」

「うん…」

明日から学校。楽しい日々はあっという間に過ぎてしまった。あつちへこつちへ町を放浪し、この町の地理を知った。ついつい外に出てあれをしよう、これをしようと一人遊びをこうじていた。時々

地元の子供なのだろう、見かけることがあった。僕はその子達を見ると電柱や茂みに隠れた。楽しそうだった。だが僕は話しかけられないほど自分が臆病なのは分かっていた。しかし友達がほしいというわけでもなかった。その時は独りのほうがより気楽だと、彼らが目の前を通り過ぎるとほっと胸をなでおろす思いだった。

僕は席を立ち自分の部屋に戻った。そしてベッドにもぐった。

明日から学校。そう思うたびにただぐずぐずとベッドの中で丸くなり、朝が来るのを遅くしたく、いつまでもベッドの上に指で円をなぞっていた。それは輪廻のリング。単なるおまじないであった。これから起こる先のことを予兆しているもので描いたのか。それとも時間を止めたいと一心で描いたのか。それとも他のことだったのか。自分でも分からなかった。

僕は布団から顔を出し、天井を見上げた。まだ真新しい、真っ白な天井。ただ広がるその光景は何も面白みさえない。

目にそんなものを写しながらただ無情に、明日の転校先に行った自分の姿を想像し、さらにそれよりも先のこと、つまり学校生活の未来を過去と照らし合わせて描いていくと、ただ自分にとっていいとは言えるものではなく、むしろ嫌な方向に向かっていた自分の回路を知った。その回路を断ち切りたいと何度思ったことだろうか。あまりのネガティブさで自分が嫌いになる。時に直すと思い立った時があったが、三日坊主よりも悪かった。

自分を操れない理不尽な気持ちに押しつぶされそうながらも、無情であることは今の状態で保つことができる唯一の方法だった。

僕の目先を冷気がふわふわと浮かび、時々僕の鼻先をくすぐる。

かすかな月明かりが空气中を舞うほこりを照らす。まるで一瞬、時間が止まったように、それらは星に見えた。

窓から差し込む月明かり。部屋に入る光の先へ目を向ける。そこには光のたまり場、水たまりのように光があふれているのだった。特にどういった発見でもない。だが誇れるものでも見つけたように、その発見は金山よりも真価を問えるものだった。僕はその小さな発

見で舞い上がった。

長い夜は続く。深夜の明かりを頼るのは月と星と街灯だけ。それ以外はない。きっと外は寒空の下、夜勤に勤めた会社員が終電に乗り帰路についているのだな。しかしここまで静かだと本当に時間が流れているのかと心配してしまう。それははなはだ都合のいいことなのだが、それで困る人は多いのだろう。

隅にたまっていた光は戻るべき場所へ帰っていく。

リビングを出てドアを閉める音がした。

今このマンションのこの一室、寝ようとはしないものは僕だけとなった。いや、寝たくないというわけではないのだが、明日がどうしたらやってこないか、を研究しているうちにこうなってしまったのだ。そうだ。そうに決まっている。

町はついに静寂か、僕の五感が感じているものはない。半永久的な時間が流れるだけだった。

ただどうしようもない。もうどうにかしようとも、どうにもならない。なぜなら日が明けたのである。日が明けてしまったら、どんなことがあるかと朝が来る。永遠に朝日が昇らなければ永遠に夜である。そうすれば人は起きなくて一生が寝て過ごすことになるのだが。

そんな叶えられない思いを抱きながら、僕は家を出て思い足先を学校に向けていた。

正景は来ない。僕は強がって父の好意を拒絶した。内心は定かではなかったが、僕はもう子供じゃない。そう自分で思っていたのだが、いざとなると父の好意は天使の差し出す手より確かなありがたいものだった。

町を駆ける小学生が学校に向かう。学校は一人遊びにこうじていた時に位置は確認している。それに迷う理由なんてない。この子らについていけばいいのだから。

だが僕はその元気な子供たちのことを知るはずもない。僕をもの

珍しい眼差しで横を駆け抜ける。

歴史を感じる古い学校に着いて右も左も知らない校舎内にて迷った。これは予想外だった。やはり父に初日だけついてきてもらえばよかったと後悔を感じる。いまさら後輩なぞ無駄なことなのだが、悔やみきれないのが事実である。

校舎内も古かった。外見を見れば当然で昇降口から廊下、そしてどこか分らない教室の前まで、まだ一度も修復さえしていないような気がした。

そこで立ち往生していた僕はどう職員室に行くかを考えた。しかし誰もここを通るような気配はなく、この廊下から見えるのは果てだった。ただ職員室に行きたいだけなのに、なぜ迷わねばならぬのか。それに外見、そんなに大きくない校舎で迷うのは、やはり地理感が悪いせいなのだろうか。

考えても何もならない。僕はとりあえず昇降口に戻ることにした。「どうしたのかな」

そこで会ったのは公務員らしきおじさんだった。形相は恐ろしく、声も低かった。僕は恐れた。こう尋ねて実は誘拐犯であることを隠しているのではないか、と不審に思った。

僕は少し距離を置いて、いつでも逃げられる態勢をつくった。

「そうか、今日は転校生が来る日だったかな？君はそうなのかい？」

「…そうです」

「よし、それなら、職員室に連れて行ってあげよう」

おじさんは顔に似合わず親切だった。父に言われたことがある。

人は見かけ通りだと。しかしそれは決して当てはまるものではなかった。

ともかく助かった。職員室に入った時には転校早々、怒られてしまった。あまりに遅すぎたので全校集会に出られなかったのだ。それで僕は直接、教室にて紹介されるようになった。もうそろそろで全校集会も終わるそうだ。それまで職員室の一角で座って待つことになった。

職員室のにおいというのはどこも同じようで、給湯室からコーヒ
ーが香る。そして印刷機のインクのにおい。それに加えて入り混じ
るタバコのおいは僕にとって苦痛だった。大人はこんなところが
好きなのだろうか、と車に染み込んだ独特の臭いさえも思い出した。
職員室に座って留まるのは初めてのことだったので、普段も入っ
てやることなのだが、辺りを見回してみると、やはりその学校の特
徴がうかがえる。人の机の中を覗いているようで、それは楽しいこ
となのである。

すると一人の先生が僕の前に現れて言った。

「相模君：だっけ。そろそろ行こうか」

担任になる人であろうか。そのように見える。

その先生に先導されるまま職員室を出て、いまだ誰も通ったこと
を確認していない廊下を通り、ある一つの教室に入った。その教室
は騒いでいるのがドアを開ける前から分かる。

静まる教室。向けられた静観の視線。そして再びがやがやと騒ぎ
出す。

先生は気にせずと言ったのだった。

「静かに。紹介する。転校生の相模秀二君だ。仲良くしてやってく
れ」

さらに騒がせる原因だった。転校生というものは、それはそれは
珍しい者であると自分でも理解し、この反応も承知している。しか
しいつになっても慣れないものだ。

視線を向ける彼らに僕は教室にいる誰とも目を合わせることがで
きず、目のやり場に困る。ここで気の遠くなりそうな気持ちであっ
た。体が火照る。そしてその後を訪れる寒気。これはいつになつて
も耐え難い。

僕は探した。

すると端の列の一番後ろ、最も暗い席に誰かがいた。その隣には
誰もいない。色黒の短髪で、鋭い目を持っていた。彼は誰とも話さ
ず、目を誰もいないどこかに向け、さらに僕にさえ興味を示してい

ないように見えた。一切僕に関心を持とうとしないし見ようとさえもしない。

僕はその時、どこもない仲間意識を感じた。

「そうだな…席は、後ろの片倉の隣だ。あの空いている席だ」

僕が席に向かう途中、視線を送られ続けたが、僕にはそれよりも彼のことが気になっていった。それに彼の隣に座れる。それが初対面にも関わらず心が躍るようで、気付くと今の自分がおかしく感じる。その席に座り、この先どうなるか分かっていったが、通りに質問攻めされた。だが僕には興味はない。隣の彼は先ほどから変わらない姿勢でいた。

隣に座ってみればなおさら分かる。もとより深い絆が深く刻まれていたような、僕にだけ分かる、いやもしかしたら彼にも分かっているのかもしれない。

質問されることはいつも同じで、その質問に対する答えはすでに決まっていた。彼らは僕に興味があるのだろうか。むしろ興味がないはずがない。

果たしてこの熱がいつまで続くのか、僕はそれさえ分かっていた。互いに合い違う興味の矛先は常に一方通行だった。

「ほら、静かに。今日は…」

休み時間の間、僕は彼に話しかけることができず、ひたすら質問攻めにあっていた。時々平和な時間が訪れたと思うと、それは一時の間で、彼に話しかけるまでには至らなかった。

聞きたい事はたくさんある。学校をどう過ごしているのか。実際の校風やクラスの雰囲気。町の秘密。それに一年中色黒なのかとか。今日は午前中に帰れる。そしてその帰り道、僕は早速できた友達と帰ったのだった。結局彼とは一度も顔を合わせないし話さえていない。

だがその日、僕は最高に楽しい日を過ごした。

友達もできたし、それ以上に遊ぶという目的以上を達成できたのだから、今日はまるでこれからの学校生活を予兆しているのだろう

かと思ってしまう。

ふさぎこむ自分に対して明るく接してくれた周囲が、過去のまわりついていた思いさえも取り払ってくれるようで、不思議と馴染み、居心地がよくなってしまった。

その夜、僕は父に今日の学校のことを多く話した。父は身を入れて聞いてくれるようで、その聞き方は尋常ではなかった。父の目の奥には違う何かが見えていた。だが僕には分からなかった。ただ今日、これから楽しくなりそうで心が踊り、生きがいを感じていた。

昨日の夜がまるで嘘のようだ。

僕はベッドにもぐる。昨日の寝不足で眠かったはずなのだが、心の弾みは増すばかりで勢いを、衰えることを知らなければ止まることを知らなかった。

僕は次の日から、一変とした生活を送ることになった。友達と約束して遊ぶし、もう友達の家にお邪魔さえしたし、後は夏休み遊びまわることが今度の楽しみだった。父もそんな僕を見て言うには、変わったな、と。しかし僕には自覚がなかった。ただへ以前と変わらぬ日々を送っているだけ。それも何週間が過ぎようとしていた。だが僕はまだ彼と話をしたことがなかった。

彼はいつも黙して話そうとしない。そして人との関わりも持とうとしないで、誰もが彼と関わらない。だから彼はいつも独りでいた。僕が彼に話しかけようとすると、友達はそれを妨害するようなタイミングで話しかける。そのまま休み時間が終わってしまう。

だが彼と僕は話せる機会がやってきた。この教室に二人だけが残されたのだった。

図工の時間、僕は忘れ物を取りに教室に戻った。するとそこにたまたま遅刻していた彼も教室の前で鉢合わせたのである。

もちろん他クラスは授業で、この教室には誰もいない。

僕はもう昔の人見知りで不安で押しつぶされる僕なんかではない。今では自分から話しかけることができる。

「おはよう」

彼の名前は分かっている。今まで出席を取り、それで名前は知った。

片倉は僕の声が聞こえなかったようにしている。それは無視しているのか、それとも届かなかった。僕の胸の中では後者が立っていた。

「おはよう」

今度は聞こえるように話しかけた。すると片倉は返事をする。

「…おはよう」

片倉の声は出席をとる時だけにしか聞いたことがなかった。たった今聞いた声もまた同じように、低音質の暗がりが好きそうで、人にはきつと届かない声だった。

これが僕と片倉が交わした初めての言葉。

僕は忘れ物を取りながら片倉に言う。

「一緒に行こうよ」

しかし片倉はまた話そうとはしない。むっつりとした表情で僕を警戒しているわけでもなく、ただ避けているようであった。

「行こうよ」

一度したことをまたしてみた。そうすれば答えてくれるだろうと僕は思った。

「…俺に関わるな」

それを聞いた時、僕の中で積み上げた、いや積み上げ途中のレンガが一気に崩れ落ちた。それに押しつぶされたようで、やるせない思いでいた。

僕は教室を出ていた。僕は片倉の言うことに決して承知したわけではない。ただ自分の中に潜む本能に従ったまで。だが僕は悔しかった。自分が片倉の一言ですべてが否定されたようで、悔しかった。片倉と挨拶だけして揚々となり、そして崖から突き落とされた。たまらなかった。僕は人生で最も屈辱とも等しい時を過ごした。たったそれだけの時間で、ここに来てからの日々を忘れてしまい

たかった。

僕は振り返ることもせず、のそのそと図工室に入った。

ただ辛かった。悔しかった。苦しかった。

その夜、僕はもう再び見ないであろう、見たくない夢をまた見てしまった。

ひどい夢だ。ただの夢、過去の夢。まだはつきりと脳裏に焼きついていて。せつかく剥がれ落ち、後はちりとなって風に吹かれてなくなるのを待つだけだった。

僕は目覚め、冷や汗だか分からない尋常な汗を背中に筋となって流れるのを感じた。まるで何本もの滝のようであった。

落ち着き横になるも、再びその夢を見るのではないかと寝付けない。僕は狭い場所を右往左往に動いた。体中で恐怖を認識したのは、眠るその落ちた先を想像してしまい、そこから這い上がれないように思えたからだ。

それにあの時の彼の目はまるで野獣の目で、一瞬だったと思ったその間が長く感じられたのである。片倉に恐怖心を持っているのだろうか。そのおかげで僕は硬直していたような心地がしていたのだ。明日、片倉とどう顔を合わせればいいのだろうか。関わるなど言われて、素直に従うような僕であるのは知っていた。しかし僕は変わった。ここに来て、いろいろな人と出会って変わった。僕はそう確信している。そうでなければ困る。僕は何のために引越して来たのか。

闇夜は寝静まった町を包んでゆく。そして永遠か。影は部屋に忍び込んでくる。

明日、片倉にもう一度だけ、これが最後で終わりにさせよう。もしまた関わるなど言われた時には、きっぱり好奇心さえ喪失しよう。ただど会話が続き、片倉も僕を受け入れてくれるのなら、友達になるう。

僕はそう心中に刻んだ。

「おはよう」

僕は教室に入るなり、隣の席に座る片倉に挨拶をした。

昨日のことで勇気が必要だった。僕はしばらく話しかけられなかった。することを先にして、その間に自身に生き血を与えていた。

片倉はやはり話そうとしない。人と関わるのが嫌いか、はたまたシャイなのか。

また同じことを繰り返さねばならないのか。

「ねえ。僕のこと、無視してる？」

僕はつい本心を声に出してしまった。

しかし片倉は言う。

「…関わらないほうがいい。君のためだ」

片倉は断固として僕と関係を持つとしない。

だが僕の思いが通じたのか、話し方は変わり穏やかになったように思える。僕はその小さな進歩がうれしかった。

それで調子付いてしまい、片倉に話しかけるが、友達に僕を誘ったので一時その場を離れることにした。

「あいつとは関わらないほうがいい」

「そうだよ。関わるなよ」

片倉のいないところまで連れてこられて、そう言われた。

「何でだよ」

すると僕は嫌な予感がしてたまらない。そしてぞくぞくと背筋を凍らせるような寒気さえ感じた。

それは昔、同じ僕。思い出した。

「母さんに言われた…あの子と関わるなって。だから相模も関わらないほうがいいって」

「そうだよ。絶対よくないって」

なぜという理由もなく、自然と苛立ちはどこからともなく込み上げる。

「なんでそんなことを言うん？」

「そりゃ…やっぱり母さんに…」

「君はお母さんに言われたからってそんなことを言うのかい？」

「それは…」

「それだったら、僕は嫌だ。大人の言うことは絶対か？」

友達の目つきは急に変わり、きつと眉を吊り上げた。

「君は母さんを馬鹿にするのか」

「僕はそんなことを言っていない。君がどう思うか、自分で決めろって…」

「それだったら君はずっとあいつのそばにいればいい。そうすればいい。君は今から友達じゃない。それと、もう僕に近付くな」

「それだったらこちらこそ願い下げだ」

僕と顔見知りの間にいたもう一人の友達はどうしたらいいのか分からず、ただ困惑で今にも泣きそうに仲介を試みようとしていたが、その必要はなくなった。

僕はそっぽを向き、足早に教室に戻った。

その後、後悔と懸念に襲われながらも、新たな決意を胸に刻み入れた。

あの教室にいる子供は皆、疑似の得体なのだろう。そういえば、誰もが片倉を無視するような素振りをするのだ。まるで軽蔑視したような目で見て、さらに避けるように歩く。

僕もその一人となった。不純なあいつのお付き、というような名目で。

しかし僕はまたあの中に混じりたくないと思った。そうすればまた、平和な日常というような生活が送られる。だがそれは本当に僕にとってもいいものなのか。

またあの時と同じに戻ってしまった。前にいた学校と同じ。その前にいた学校と同じ。さらにその前にいた学校と同じ。だが今度は何かが違っているような気がした。それは何者も目の前の障害はなく、一つの目的に対してひたすら向かえばいいからだ。

それで僕は一人になったわけだが、一人になったような心持はなかった。

今日も何も話さないようなクラスと片倉。だが僕は片倉に話しかけた。

すると片倉は言う。

「お前、戻れ」

僕はあの涙もない集団に戻る気がさらさらなかった。それにもう戻るはずなんてない。きつと元友達は見向きさえしないだろう。

「俺はしょうがないが、お前はどうにでもなる。今のうちなら間に合うぞ」

そう言うのと片倉はそそくさと帰っていった。

自分でも変だと思うが、その後をこつそりとつけてみることにした。まだ片倉の家は知らなかった。どんなところか知ってから帰ろうと思った。

それは好意や親近感などの興味からなるもので、僕には自制できないものだった。

見つからないように電柱や塀に身を隠してつけた。そして行き着いたところは小さなぼろいアパートだった。

アパートの階段を登ったことを確認すると、僕もその後をつける。

「おい。何をしてんだよ」

僕は驚き、その声のするほうを振り向いた。

「何つけてんだよ。お前、俺のストーカーか？」

そこには片倉がいた。僕はまた、驚いた。

「さっきここを上ったんじゃない」

「このアパート、無駄に二つ階段があんだよ」

ただ僕は自分の立場という、自分のやっている行為を恥ずかしく思った。そしてそのやりきれない思いでその場を早く逃げたかったが、片倉は言う。

「とりあえず、ここじゃ何だ…上がるか？」

住宅地よりも郊外にたたずむアパート。そこに片倉の家はある。そしてその二階の一番奥の部屋、そこで片倉は暮らしている。

中に入ると物が部屋のいたるところにあり、多分もとはもっと広々としているのだろう。

その狭い場所を通り、僕らは居間に入った。

「今日はおふくろ、仕事でな」

両親共働きなのだろうか。僕は空いている場所に腰をかけた。

「それでお前は何で俺をつけてたんだ？」

その理由はない。ただ好奇心からつけてきたなんて言ったら、きっとどんな目で見られることだろうか。まさにその日、僕は変わり者の仲間入りだ。

それにしても片倉の目はどことなく弾みというのか、いつも見ている目よりは生きているようにうかがえる。それはまるで、ここに人が入ったのは僕で初めてであるかのようにだった。

「まあ…人の家って、どこか気になるもんじゃん」

「ははは…お前って面白いやつだな」

片倉は笑いながら言うが、僕にとってその言葉は初めての体験をさせた。僕はうれしかった。そんなこと、生まれて初めて言われた。僕はどこからともなく現れる熱を体で感じた。

「そんなもんか…ま、くつろげよ」

僕は言われる前にくつろいでいた。それはこの部屋の独特のにおいというか、その染み付いた何年もの年月が、僕にはそれがことなく懐かしく、僕の家庭とどこか類似しているものがあつたような気がする。家の中はまったく正反對なのだが、どこか、自分の心の部屋、そこを開けてみると、やはり似ていた。

片倉は楽しそうなステップを踏みキッチンに消え、また戻ってきた。その姿はまさしく喜びに間違いない。僕は暗くなっていく外を見た。

「理由はともあれ、何で俺に近付くんだよ」
持ってきた飲み物を目の前に出した。

もう僕にこのつけたという事実は別に警戒するようなことはなかった。それにこんなに話すやつなのか、と圧倒されてしまった。

それほど友達などと無縁の僕らだったのだろう。

「ただ…僕はいつも一人でいる君が気になって…」

片倉は急に黙り、僕を見ていた。その目は怒り狂う犬の目に変わった。

「…そうか。それで俺がかわいそうだと思ったのか…」

片倉は自分で持ってきた飲み物を一気に飲み干して、微笑むと言った。

「もう…帰れ」

片倉から微笑は奪われたように消え、僕はその変わり様に啞然としていた。

まだこの部屋に入室してから五分とも経っていない。出されたコップの中身も変わらなければ指紋も付いていない。この部屋に痕跡は残していない。

そして僕は威圧で追いやられるような心地をしながら外へ追い出された。

「じゃあな」

強く突き放された言葉で僕は勢いよく突き飛ばされて腰を強く打った。結局僕は何をできるというわけもなく、ただドアの前で見ているほかなかった。きっと骨まで振動したであろう辺りをさすり、ひたすらこらえることしかできなかった。

外はもう闇に包まれる寸前で、僕は重くなった腰を持ち上げて片倉家を後にした。ちらちらと後ろを見てドアが開かないかと確かめながら見てみたが、それが再び開くはずはなかった。

僕はまだ一度しか通ったことがない、殺風景な風が吹く道を家に向かつて歩いていた。いつもより外灯が暗く思える。帰れることは分かっている。ここは山に囲まれた集落で、いつかは知っている道に出る。そんなに大きくないことは知っていた。だが今日のこの時間、僕は長い距離を歩いて帰宅した。

それは僕が片倉を怒らせてしまったのか、考えていたからかもしれない。それにあの調子だと明日は学校で話してくれもなさそうだと思った。またもとの関係に戻ってしまうのだろうか。そう考えるだけで寂しくてたまらない。だがそれは一瞬の思考であった。まだ回転を仕切ることができないままの頭を整理しながら、僕はひたすら自分の思いに向き合った。

いつからか。僕が人に対して不信を抱き始めたのは。

確かそれがきっかけで僕は一時、不登校になった覚えがある。この事実は今では心の奥底に棄て、扉を閉めて出入りはしない。一方的な捨て場だ。またこのようなことが起こった時、僕は同じところに棄てずにまた新たな部屋を作る。その回数だけ引越しをした。

ここに来て、変わったと思った。心の優しい人が多くいると思った。それだから僕に友達ができた、と思った。しかしそれは偽りで覆われていた。

それなら一人のほうがいい。僕は自ら、自らの身を誰も知らない穴に投じた。

そこで考えたこと。僕は恐れた。自分にとって有益、良いという情報は聞き入れるのと同じように、その逆をする。自分がよっぽど大切で、まるで自分がいいように見られたいように、飛び切りの偽善を振舞い、素の自分を出さない。いつしかは自分の影が本当の姿に思えてしょうがない。

その時だっただろう。僕は人が信じられなくなった。いや、それは言いすぎか。比較的信じ難くなったことには違いない。

そして今はどうだろうと家に帰って自問してみた。すると自答するための答えが見つからなかった。いくら考えたところで、今の僕には見つかるはずがなかった。

次の日、僕は落胆と後悔と、不安を背負って学校に向かった。学校に遅れそうだったから早足で歩いていたつもりだったが、時間はゆっくりと流れていた。

変わらないクラスの中で、僕はしばらく孤独だった。僕を見るものはいない。時々見られる気配はするのだが、それは僕の後ろのものをしているようであり、僕もそのことを望んでいた。隣の席にはいつもいる片倉はいない。それはつまり、姿かたちがない。

僕は一人、今ここに片倉が現れた時のシミュレーションをひたすら繰り返していた。どのような目で入ってくるところを見て、どう話しかけて、どう対応すればいいのか。それは自分がその時、確かな行動をして昨日のことを帳消しにしようと思っているが、一向に進まない。

結果、そのような苦の状況を脱することはできず、片倉は教室に入り堂々と自分の席に座った。

授業に、休み時間に、給食時に、放課後に。切り出そうとも切り出すことができなかった。止めることもできない時間をただ眺めているだけで、距離を置きながら一人でいることを不思議に思っていた。

僕はその日、ついにすれ違うまま帰るのだな、と覚悟した。そしてまた明日。明日なら違った条件下にいるかもしれない。だがまた明日、と繰り返す一途をたどるのかもしれない。

帰り道、狭くなってゆく道に夕陽が一筋垂れ、僕はその一本を渡らなければならなかった。それゆえ、背後に伸びる影が戻る道をなにもものとしていた。

一人という日々を過ごして一週間は経つただろうが、僕にはそれよりも数十倍に長く感じられた。いよいよ相戻るようなことができなくなってしまうかと半ば諦めかけていたところであった。

片倉は振り向かないし、僕も話しかけることができず、日増しに悪化していくというネガティブな思考のみが脳に働きかけ、毎日が無常の限りまわり続けた。

しかしそんないつもと同じだと思われたある日のことであった。下校途中、僕は人の気配を感じたのだ。僕はそれが誰だか分からない

かった。そして不安と恐怖に襲われ、足を速めた。立ち止まって振り返り、誰だか分からない人と対峙する勇氣はなかった。今度、あの角を曲がるに折、その一瞬に誰だか見よう。

そうして僕は角を曲がるまで、ひたすら背後に迫る人影を気にしながら、もしという対策を案じていた。逃げることも、きつと倒してしまおう。自身の過剰な過信は何度もしたことがあるが、実際その場に遭わせたら、きつと逃げの一手を先行するに違いない。

僕はつばを飲み、気を落ち着かせるよう体に言い聞かせた。そしていよいよ角を曲がることになり、流し目で視界に入った人影を明確にしていく。だんだん大きくなっていくその姿は、年中色黒である、片倉だった。

探偵のように電柱から電柱へ、身を隠しながらこちらを窺い、こちらが気付いているにもかわらず、彼はいまだ気付いている様子ではなかった。

それならば、と僕は角を曲がったところで、すぐさま走った。そしてすぐ、片倉に見られない陰に身を潜めた。

息を潜めていると、片倉は角を曲がってきた。きよろきよろと辺りを見回し、すっかり困惑したような顔を浮かべていた。片倉はこちらに向かって歩いてきて、僕は笑いをこらえながら、片倉を通り過ぎるのを見ていた。初めて通る道なのだろうか。おそろおそろ、一歩が遅かった。

僕は確かに片倉が通り過ぎるのを見ると、気付かれないように背後に迫った。そしてわつとおどかしてやった。

「わあああ……」

片倉は突然のことに驚き、退き、しりもちをついた。呆然とした表情から発せられた声はあまりに間の抜けていた。案の定、人通りはなかった。この姿を見ていたのは僕だけだ。

片倉もそのことを気にしていたようで辺りを見回してから、何も言わずにゆっくり立ち上がった。尻を払い、僕を見る。

何を思っているのか、それぐらい、僕には分かっていた。

「それで、何で僕をつけたんだ？君、僕のストーカーか？」

「いやあ…人の家って、気になるもんじゃあ…ないかな」

すっかり片倉の顔は赤くなって、目を合わせようにもできないようだった。

一瞬、片倉と僕は目が合った。その時、互いに笑みをこぼしてしまい、そしてしばらくぶり会っていなかったかのようになり、そして無言で僕は家に向かって歩き出し、片倉も僕の後を歩いた。

あれからしばらく何も話していないというたまったストレスを晴らすかのように、怒涛ともいえる勢いで話し出した。

そうか。互いに話し出せなくて、ただぐずぐずしてただけだったんだ。まだ交友が少ない僕らにはまだ学ばねばならないことだったんだ。気付かないことやそういうことではなくて、単に知らないことを見つけようと知っているところをいくら探索したところで何にもならないことを知った。

僕らは肩を並べ、僕の家を目指した。僕は家を紹介するつもりだ。これから片倉がまた僕の後をつけないようにするためである。

出会ってまだ三ヶ月ほど経っていないが、僕にはもう三年も四年も経ったように思える。まるで昔からの幼馴染であつたかのように、二人三脚で意気投合していた。

勉強はついていけているし、小学生らしい遊びは毎日、日が長いから時には遅くまで遊んで父に怒られたっけ。時にはまた片倉と喧嘩して、だけどそれは回数を重ねていくうちに、そのしばしの停戦期間が短くなり、時期に消滅していた。

梅雨の間、もちろん僕らは外で遊ぶことはできない。だから大概室内で遊ぶ。

今日もその雨なのだ。冷たくない、ただ生ぬるい気持ち悪いばかりの雨の中、僕らは僕の家へ目指した。いくつもの水溜りを飛び越え、雨の後味を避けようとしていたのだが、水溜りに飛び込んでしまったら、傘をこつもりにしたりしていたので、結局全身に雨を浴

びてしまった。

高いマンションの階段を駆け上がり、今日は父が出かけていたので玄関のドアは自分で開ける。そしてこんなこともあるうと出かける前に用意しておいたタオルで体を拭き、そして上着を扇風機で乾かした。

今日はどうする、などと片倉と話していた。どうせそれは決まっていることなのだが、確認の意味で交わしたことだ。そんな大それた意味はない。

僕はゲームをしながらよく話す。僕はもともとこの土地にいなかったからこの土地について知りたいと思っていた。それで夏休みに行くのだ。

「この町ってさ、山に囲まれてるけど、こうやって雨が降ると、溜まらないのかな？」

「そんなはずないだろ。おわん型だからってダムみたいに水がたまるもんか。しかもよ、それだったら、この話してる前に町は水没してるって。そんな発想、したこともなかったよ」

「じゃあ水はどこに行くんだよ」

「そんなの土にしみこんで、蒸発して雲になって、雨が降って…その繰り返しだよ」

「でも前住んでたところは、強い雨が降っただけで洪水に近い状態だったよ」

「…きつと土がなかったからだろ」

時々世間話というか、あまりに僕が無知であることをあらわにしていた。時々集中し、余裕ができたら話し出す。それをサイクルのように組んで時間がある限り続く。

「そういえば滝、ここら辺にあるだって言ってたじゃん」

「言ったな」

「それでさ、連れてってよ。そこ。実は僕、滝なんて見たことないんだよ」

「都会人は知らないことがたくさんあるんだな。まあ、俺もビルな

んて代物、テレビでしか見たことないけどな。まあ、夏休みになったら連れてってやるって…ところで、お前はかなづちなのか？」

「いや、何で？」

「都会人のイメージ」

「何だよ、それ。都会に対する偏見じゃん。僕だって田舎のイメージ、臭くて何だかしけたところかと思っただし」

「おい、それは言いすぎじゃねえか。しかも俺は人柄とかのイメージなのに、何でお前は田舎自体の侮辱なんだよ」

「何だって侮辱しあつてることには五十歩百歩だろ。それに人柄を侮辱したのも全体を侮辱したのと同じことだろ」

僕は一時ゲームを中断して、面と向き合った。

「そんなの関係ねえよ。だっておかしいだろ。そこら辺はきちつとするぞ。俺は絶対同じじゃない。だってそうだろ。侮辱の対象が違う」

「いやいやいや、ぜんぜん違うから。だってさ、結局…もうどうだっかっていいよ。やろう」

「…そうかもな。話しても終わらないな、こりゃ」

僕らは向き直り、ゲームの続きを始めた。言い合いは雨でかき消された模様、後に新たな話題に移るのだった。

今日だって同じ一日が同じように過ぎていくのを、二人で過ごしていた。毎日という日々が楽しかった。たとえ友達といえる人が学校に一人しか、町にいる人で一人しかいなくても、僕はそれでいいと思っていた。変わらない日も、永遠の友達も趣がある。

時間が過ぎるのを忘れて、僕は夢中でゲームをやっていると、父は帰ってきたようでリビングのドアを開けた。

「ただいま。ひどい雨だな…おお、友達か」

「あ、おじゃましてます」

「いいよ。いいよ。ゆっくりしていつて。私は自分の部屋にいるから」

父は陽気に出て行った。何しに入ってきたのか分からないが、と

りあえず僕のことを気になったのだろう。父はぬれた足をひたひたと廊下に音を落とし、部屋に入ってしまった。

僕は雨が嫌いだ。濡れるし、気持ち悪くなるし、いいことなんてない。だが父は好きだと言う。僕はある時、その理由を尋ねたことがあった。それは雨が奏でる美しい音楽に耳を傾けると落ち着くからだと言う。さすがに作家の言うことだと、生半可に理解しながらも感銘を受けていた。しかし僕は嫌いであることには変わらない。それはいつか、昔、雨の日に因縁でもあるかのようにだった。

外は相変わらず雨がやむ気配がない。少しずつ暗くなっていつているのは分かるが、雲が濃くなっていくように思えて、雨が降り終えれば明るくなるだろうと考えていた。しかし僕はいまだ、この土地に水がたまらないかと不安を募らせていた。

それとは一方、そんなことをまったく気にしていない片倉は言った。

「そういえばさ、お前の父さん、何やってる人？」

「作家だって。僕は読んだことはないけど。部屋にたくさん本があったけど、僕には読めない文字ばかりだった」

「へー、すごいじゃん。今度ぜひとも部屋を見させてもらいたいものだ」

「だけどいつも入れてくれないんだ。僕は本当に父さんが部屋に入っていく時、ちらつと見ただけ。僕が入るのが嫌みたい。集中できないし、荒らされたら嫌だって」

「それはあるかもな。俺だって……いいや。作家って気難しいな」

「そうだね」

「それよりも、入ろうという試みは？」

「ないね。人の嫌がることはしない主義なんだね」

「それはそうだな。逆鱗に触れないのが利口だな」

ガラスをたたき、まるで部屋に入ろうとしている。先ほどよりいっそう激しく思える。滝のように降る雨に対し、部屋は湿気に覆われていた。ストーブは置いていないがだんだん暑くなっていくよう

だった。いまや雨の音なぞに気にしないようになっていた。

「もうこんな時間か」

時計を見た片倉は言った。長い針が動き、やっと時間の流れを思い出した。

「もう帰るの？」

「どうしようかな…なかなか止まないし…母さんもまだ帰らないし…」

「それなら食べていくといいよ」

まるで外で盗み聞きでもしていたのか、父はリビングに入ってくるなり言った。僕もそれはいいと思った。僕は片倉の言葉を待った。
「いや…もしかしたら早く帰ってくるかもしれない…やっぱり帰ります」

「そうか…」

父は以外に友好的だ。人に対してなら誰にでも優しい父の姿は知っている。そんな姿を見てしまうと、想像で浮かび上がるまだ見ぬ母の面影というのだろうか。きっとそうなのだろう。理想が浮かび上がった。

片倉には父がいない。その理由は分からない。やはり聞きづらい。僕には母がいない。僕がまだ立って歩けない頃に死んだと父は言う。

僕は時々、片倉を憧れる。こんなことを言っではきっと殴られるだろうが、母がいてうらやましい。それなら片倉も父がいてうらやましいとでも言うだろうが、きっと僕はそのことに腹立たしく思わないだろう。

「帰ります。おじゃましました」

「こんな雨だし、送っていいこうか」

「いや、迷惑をかけるのでいいです。ありがとうございました。おじゃまします」

ここから早く出て行きたい様子で、あまりに丁寧なお辞儀をしてそそくさと片倉は出て行った。

父は片倉の背中を追うように見て、玄関のドアが閉まるまですつと一点を見ているようだった。そんな片倉に執着する父が気になった僕は父に尋ねた。

「父さん、気に入ったの？」

父は体をこつちに向かせるが、首は固定されたままで言った。

「いや…どこかで見たことあるって言うか、なにか他人事には思えなくてな。デジャブ、的な」

僕にはデジャブという言葉は知らなかった。だが父の勘には不思議と同意できた。僕にも初め出会った時、そんな心地がして無償に何かが駆り立てられた。ぞくぞくとするような、不思議な気持ち。どうなのだろう、正直なところ。心のどこかで、どうしても片倉が遠くにいる人に思うことができなかった。今では友達の関係であることがそう思わせるのではなく、初めから出会った瞬間、一度会ったことがあるというような違和感というか首を傾げる表現に近いのか、いや特別な何か、きっと父の言うデジャブと同じなのだろう。つまりそれが僕の心を異なるものに変えた。

「そろそろご飯にしようか。お前も手伝ってくれ」

「あ…うん。分かった」

僕は今やっているゲームを切り上げ、父と台所で夕飯の仕度を始めた。支度の時も、食事の時も、話題に乗っていたのは片倉のことだった。

夏休みもあと少し。そのことを実感しながら正月のように遠く待ちわびていた。

片倉と今日も遊び、しかし今日は片倉の用事で早く別れた。

家に帰れば父はいた。机に向かって仕事をしていた。

僕はただいまと言うだけで、邪魔してはいけないと忍び足で自分の部屋に向かった。

電気をつけて、ふとカレンダーを見た。そういえば今朝もカレンダーを見たのを思い出し、今日は七夕であったことも思い出した。

そういえば今日は七夕か。天の川、見えるかな。

窓を開けて空気の入替えついで、夕暮れに染まる空を見上げた。よくよく見てみれば、星は見えるだろうか。きつとあそこにあるだろう。夜になったらあそこからあそこまで、天の川が見える。きつとそうなのだろうな。

夜を楽しみにしてそれまで何しようかと考えていると、父の声でした。

「帰ってるのか？」

僕はうんと言い、部屋を出た。

「今日も片倉君と遊んだのか」

「うん。そうだよ」

今日も夜が来て、そして空を見上げれば瞬く星が見えるのだろうな。まだ夕暮れだが、それはすぐに訪れるのだな。

テレビなんか見て、夜を待ち遠しくしていると、電話が鳴った。

父は台所で皿を洗っていた。

「俺、片倉だけど、これから大丈夫か？」

「え、何で？」

「いいから。ほら、出てこいよ。いつもの場所で待ってるからさ」予想は付いていた。七夕であるから、きつとどこかよく見えるところでも連れて行ってくれるのだろう。

「ちよつと待って…父さん。これから出かけてもいい？」

「何でだ？」

「天の川見に行く」

「遅くなるなよ」

「分かった…いいよ。すぐ行く」

電話を切った時、父は皿を洗い終えたようで、リビングに出てきた。

「気をつけて行けよ」

「分かってる。行ってきたーす」

もう七時になるだろうか。まだうつすらと明るいくらいで、やや暗いところも石があるくらい分かる。しかしどの家にも灯りはついているところもあった。向かう途中、窓から湯気が立つところから、呑気に鼻歌なんかが聞こえる。何の歌だろうか。窓を開けた家からにぎやかな食卓、そしてテレビの音が聞こえる。それに合わないセミの声。虫の声。邪魔したいわけではないだろう。人工と自然に分かれて、夜は自由ににぎやかに騒がれている。

その最中でようやくいつものところに着いた。

「何だよ。どつか行くのか？」

僕は分かっている。次に何を言うか分かっている。どこに行くか、なんとなく予想がついている。顔では表さないよう気を付けている。心の中で今、腹を抱えて笑っている。

「いいところだよ。ほら、行くぞ」

片倉を先に僕はその後をついていく。店先から遠く遠く離れていった。道に交う人はどこへ行くのだろうか。家に帰る人だったり、きつと僕らと一緒に目的の人もいるだろう。

知っている道は続く。きつとまた、知らないところへ連れて行ってくれるのだろう。

わくわく心を躍らせてついていく。景観は見渡す限りの水田に変わる。山の方へ向かっている。堂々たる山は夜の静けさに動かなかった。自転車をこいで景色は右から左へ移り変わっていく。

「どこまで行くんだ？」

「あと少し」

何回尋ねても片倉は同じことを繰り返すだけで、ただ僕は片倉の背中を見つめる。そしていつの間にか真っ暗になっていた。移る目は空に向けられた。

真っ暗な背景にまばゆいばかりの原石が散りばめられていた。こんなもの、都会では見ることはできなかった。父から聞いたことがある。空気の清浄さで見える星が違っただとか。しかしそこからは

天の川は見えなかった。山のほうだろうか。

いつの間にか、左右、山に囲まれていた。山の谷間だろうか。

「ほら、着いたぞ」

小さな丘の下。自転車を止めそこを駆け上がり、立ったまま口はぽかんと開け、自転車上とはまったく違う空を見た。

山と山の間。そこから伸びたような木の陰。ざわざわつと揺れるのは、竹だろうか。そして今まで見たことのない川が山から山へ、流れている。そして水底には宝か。わくわくする。あれを取り出してみれば、手にとってみれば、きつと美しいことだろう。

片倉は隣に座った。

「お前もここに寝てみるよ。気持ち良いぞ」

それもそうだった。風も吹いてきて、丘を沿って走るのだ。

「ああ、気持ち良いな。お前、ここによく来るのか？」

「ん…ああ」

何だか聞きづらいことを聞いてしまったような気がする。片倉の声がおかしかった。それに黙り込んでしまったまま、その横顔はじつと夜空を見つめていた。思いつめているように見えた。何か感じられるものがある。何か流れ込むような、その、思い出が。

しばらくすると、肌寒くなるのを感じた。そういえば、こんな夜に父と以外で外と出ているのは初めてだった。

ざわざわ、と林はざわめいている。

「時々な、黄昏っていうか…好きなんだ、この場所」

片倉の口は突然開いた。もう話すことはないだろうと思っていた僕はただその言葉を聞きながら、夜空を見つめ続けていた。

「何ていうか…思い出すんだよ、昔のことから今までのことをな、いちいちさ。これからどうするか、とか、未来、将来、どうなるかとか、考えちゃうんだ。そうするとさ、自然と時間も忘れて、唯一自分の時間が持てる場所なんだ…それにここの風景も良いし」

苦笑いだろうか。そうには見えない。照れているのだろうか。そうにも見えない。不思議な笑みを浮かべている。そのうつすらと見

通すような目から、空に映る星が見えた。

「昼に来てみるよ。すっごいいい景色だぜ…時々、ここで絵も描くんだ…」

「絵？絵って絵画？どんなの描くの？」

意外な事実だった。片倉のこんな容姿でありながら絵を描くなぞ考えられなかった。ただ何よりも興味と好奇心が後押しして、その絵が見てみたいと思った。

「今度見に行くよ。いい？」

「…いや…なんでもない」

片倉は僕に背を向けるようにして寝返りを打った。

どうしても僕は知りたかった。片倉が初めて、自分から自分のことを言った時だった。

「どうして、どうして？いいじゃん。見せてくれたって」

「いや…ちよつと…」

「夏休み中には見せてくれる？」

「いや…」

「何で？何で？」

そうして僕らはそんなこの先、進展さえ見えないことを延々と繰り返して、片倉が逃げるように立つと、その話は途絶えた。

家に帰る途中も片倉は断固として話そうとはせず、分かれ道では、じゃあな、と言って片倉はまだ僕が追ってくると思っているのか、ものすごい速さで帰っていった。

僕はさすがに追いかける気はしなかった。疲れた、とかあきらめた、とかではなく、結局は、きっと見せてくれるだろう。いつしか片倉に対してそんな信頼を抱いていた。

僕にもやりたいことがあると言いたい夏休み。それも無情に出される宿題。学年を重ねる毎に、また宿題が少なければいいと強く思う気持ちと比例して宿題はますます増えるように思える。それをせみや夏の強い日差しは嘲笑うかのように強く僕を照りつける。

それも夏休みがやってきたせいでもあるが、これは喜びなのか、それとも悔やむべき気持ちなのかは明確ではない。しかし分かることは、気持ちがすべて悔やんでいることではないということだ。

それで終業式なんてものは意外に短くその中の校長の話は、まあ生徒にしてみればどうだっていいもの、それは先にある夏休みに憧れの目が輝いているからであり、こんなことを言っては嘘になるが、校長のありがたい話に耳を傾けているうちに時間はあつという間に流れてしまっていた。

炎天下の下校で僕は片倉と肩を並べた。これから何する。夏休みはこうだ。そうだ、と議論も交えながら、主に夏休みをどう快適に過ごすかが議題で、また今日は午前での下校のため、午後の予定も立てていた。そして別れるところで別れ、暑い中走って帰った。汗も気にせずに、だが蒸し暑いながら時々吹く風は僕の体を冷やした。帰ると父はいて、クーラーのよく効いた部屋でワイプロを打っていた。

「お帰り。今日は午前だけなのか」

「うん、そうだよ…仕事？」

父は手を止め、立ち上がると、キッチンに向かった。

「ああ。悪いな。昼はこれからなんだ。待つてくれな」

まだ遊ぶまでの時間は十分にある。それまで何をしようか。汗のせいで体はすっかり冷えた。そしてあまりの寒さに耐え切れなかった僕はくしゃみをした。父はそのことに気付いてシャワーを浴びるよう言った。

風呂場から出た時にはもう昼食はできていた。食べながら今日の予定を父に話していると約束の時間はあつという間に来るもので、時計を見ないで夢中に話していたので時計の針はもうすぐ約束の間だった。

昼食をあつという間に平らげて部屋から財布を持ち出し、家のドアを思い切り蹴るようにして開けた。

暑かった。さっきまでいたような場所に思えず、その暑すぎる太

陽の日財にめまいさえ感じた。このままではいつ倒れてもおかしくないな、と思いながら先を急いでいた。

約束を守ろうと走ったが、少し遅れてしまった。そこにはすでに片倉はいて、こちらに気付くとムスツとした表情で言った。

「遅れてるぞ。何かあったのか？」

理由なんて、ただ父と話してただけだなんて言えるはずがなく、一生懸命に違う理由を作り出そうとした。

「いや…財布がどこ見つからなくて…」

僕は片倉にジツと見られたが、ぼろが出ないようにすると余計なつばを飲み込んでしまった。しかし片倉は納得したのだろう。片倉の顔は和らいでいった。

「ふーん、そうか。そんなことより、行こうぜ」

そんな片倉の何か垢抜けたような言葉を聞くと、暑い中一生懸命になっていた自分が滑稽に思えてくる。自分が恥ずかしく、もしかしたら別に隠すようなことでもなく、穴があつたら入りたい気持ちであつた。

しかしそのような気持ちなど、泡が消えるように時間が経つにつれて消えていく。消えたのではないのかもしれない。片倉といるとそんなことも忘れてしまう。同時に時間も忘れてしまうことなんてしょっちゅうで、たまに遅く帰れば父に怒られたりもした。だが決してそのような暮らしが嫌いなわけではない。

たった二人だけなのだが、いつもいつも、毎日毎日、変化のない繰り返しを送っているだけなのだが、時間はあつという間に過ぎるのは相変わらずで、だが不思議にその繰り返しは嫌ではなかった。その一日が貴重な時間であつたのは確かなことで、今考えてもそれが海岸に落ちるきれいな貝殻に思えてくる。一枚一枚が形や色が違ったり、その変化を見るのも面白いし、二枚の貝殻を見つけ合わせるのも難解だが楽しいだろう。

青い空、白い雲、緑の山、見渡す限りの田んぼに澄み切った空気。それは独特のにおいをもし出した土のにおい。

僕は町を離れて田んぼのあぜ道を歩き、駄菓子屋に向かった。

片倉はもうすぐだ、を繰り返して、田んぼの狭いあぜ道を落ちないよう気を付けながら、まるで平均台の上にいるかのように歩いて舗装されている道を目指した。

ポンポンポンと水道からくみ上げられた水が水田に流されて、そのせいなのだろうか蒸発する水蒸気が目に見えるようであった。その道中、ぴよこぴよここと僕の前を飛ぶ虫が見られる。

しばらく歩くとコンクリートにたどり着き、橋を渡ろうとしたらそこから透き通るような水が見えた。つい足を止めて水面の先を見た。何かいる。土に身を潜めている赤い甲羅がそこにあった。

「ザリガニが珍しいのか？」

初めて見たその生き物は前住んでいた付近の川では到底見られなかった。これほど透き通っているわけではなく、汚く濁っており、そこにゴミを投げ捨てる人がいたのはよく覚えている。自転車上から、車上から、大きなゴミ箱に投げ入れた。

ザリガニはこちらを窺っているように見えた。

「ああ。テレビでは見たことがあるけど、生では見たことがない」

片倉はまさにその言葉を言った僕を改めて見なおすと笑い出した。「変なやつだな、お前。ザリガニなんて全国各地にいるじゃん」

そんなことを言われたって、全国の一部のいないところに住んでいたのだからしょうがない。

馬鹿にされてもそれは僕が無知なわけではないのだから気にしなかったが、あぜ道を通った時、僕は足を滑らせて危うく水田に落ちようとしたのを片倉が見て笑われたのが今でも癪だった。

駄菓子屋に着いて、僕はまた驚いた。駄菓子や自体も初めて見たものだったのだ。今にも屋根の瓦が一斉に崩れ落ちてきそうな肅然とした古屋でまさかと思った。遠くから見たら物置か、すっかり廃れて中には蜘蛛の巣だらけの家かと思い、その先を見ていたが、片倉が指差した先にはこれがあった。

出入り口頭上にある看板が落ちてこないと警戒しながら入ろう

としたが、暗さと静けさが涼しさを誘い出して休憩所に入る風は風鈴を鳴らし、僕らは開放的な空間に吸い込まれるように入った。

僕は何かめばしいものに目を向けていた。店内をいつの間にか一周二周と終わり、三週目に入ろうとしていた。その時になるとさすがに小さなお菓子が見えるようになっていたが、いよいよ五週目に入り、お菓子を見続けるのも疲れて店内を見渡すと、ここの店主だろうかおばあさんがいることに気付いた。

「うわっ」

存在感も影さえもなかったから、あまりに驚いたのでつい声を上げてしまった。

おばあさんはぎょっと目をこちらに向けたので、目が合ってしまった時やるせない気持ちになった。

片倉は寄ってきて、僕の横腹を突いた。そして小声で早く決めろ、と言っ。

僕はすぐに初めから気になっていたものを手に取り、会計できるのかどうか分からないおばあさんによつてあつという間に会計され出口に向かったが、片倉が水の入った箱からラムネを取り出すのを見て、また会計を済ませた。

僕らは外に出て店先のいすに座った。僕はこのラムネはどのようなにして開けるのか分からなかったが、片倉があつさり開けるのを見て、見よう見まねにやろうと思ったが、できなかった。すると片倉は開けたラムネと僕のラムネを交換してくれた。

ラムネは買った時から冷えていて、この暑さの中で頬に当てると生き返るという言葉がよく似合う。以前に暑いからと同じように頬に氷を当てたことがある。しかしその時とは違う冷涼を感じられた。片倉と同じタイミングで息をつき、まるで老人二人がのほほんとしている様子そのものだった。

そういえば今日は学校へ行ったのだな。さつき昼食を食べたつけ。あれから何時間が経っただろうか、などと今日あったことを思い返していた。するとそのことには気が付かなかったのだらう。陽で焼

かれている道の向こうからやってきた人影があった。

僕は片倉のほうを見ると、遠く空の向こうを見ていたので、わき腹を小突いてやってくる人影を教えた。

「チッ……」

僕はその笑いながらやってくるやつらと片倉の舌打ちを聞き、その関係を曖昧だが把握した。

この店の前で自転車は止まり、降りると片倉を呼ぶのであった。それはまさしく悪役らしい低い声であるのだった。

「おい創一。お前、ここで何やってんだ？」

「もう来るなって言っただけだろ。」

脇からにやけた顔がひょっこりと出てきた。そしてもう一人、何も面白いことがないのに笑う男がいた。

「お前らが勝手なことを言っただけだろ」

片倉は相手の顔も見ることせず、淡々とラムネを飲み続けた。なにやら以前から因縁の仲らしいのだが、その因縁になったわけは分からない。しかしそれが分かったということかどうかでもないし、特に知ろうとは思わなかった。だがやつらは上級生らしいのだ。なぜ片倉につるむのか。それだけは気になった。

そしてその中のリーダー格の男が言った。

「お前の隣のやつは誰だ？」

「おい……今年転校してきたやつだろ」

隣にいた男がその男に言った時、そいつはぽかんとした顔をした。

「あ……そうだったな。それでその……こいつは誰だ？」

「お前に教える必要があるか？」

片倉は頬を緩め、今にも噴出しそうな顔をして相手の目は見ることができないようだった。

片倉がそんな頃、店先に吊るされた風鈴の音が鮮明に鈴の音のように伝わってきた。

そしてその場所にいることに体が熱くなってきたようで、額から汗がにじみ出てきていた。脇にいた男がそのことに気付き、横目で

その様子をつかがうと、さっさと後ろの男を連れて駄菓子屋に入っていた。

そのことに気付いたのがもう一度風鈴が鳴った時で、目の前の男は辺りを見回し、ついにすでに駄菓子屋の中にいる二人を見つけた。そしてそれを見つめると、またこちらとにらみ合い、棄て台詞を残していった。

「もうこの駄菓子屋に来るなよ」

額の汗をぬぐい、やつは中へ入っていった。

「なんなんだろうな…あいつ」

僕はどうしてもその関係の中へ入りたい理由はなければ、入ろうとする理由はなく、それは不和に思えたからかもしれない。だけど最後にはその関係があまり悪いとは思えなかった。なのはこの二人が何か衝突して、いつまでもそれが固いもの同士で緩和されずに長く停戦ラインを保ってきたのだろうと考えたからだ。それにそんなに悪いやつには見えなかった。外見は意外に物を言うことを、僕は知っている。

「行こうよ。もう飲み終わったし、それにここにはもう用はないしね」

「ああ…悪かったな、なんか」

片倉はうなじを触り、首を回して疲労を感じているようだった。

「いやいやいや。また来ようよ。あの人、面白いし」

「そうかあ？俺、あまり応対したくない。疲れる」

僕は笑い、片倉も笑う。そして僕らはまた干上がる道を歩いていき、また違うところへ転々と歩く一日は早く過ぎるのだった。少しの間の滞在だけだったが、僕が行きたいというところは大体行った前にもこんな日があったような気がする。遠く空の向こうに消えていった一日だった。

あいつらとの出会いもあったし、それはこれからを予兆しているようにも思えて、充実な生活というのが目に見えていた。

「あいつ、お前の何なの？」

「あいつは…一応、上級生なんだけど…いつからか無駄に俺に絡むんだよな」

そのことは片倉さえも分からないらしいのだが、どうやら大体の目星が付いているようだった。しかしそれを知ろうとはしなかった。いつかは分かるだろう。そんなアバウトな考えを持っていて、分けることに自信があつた。

不思議に思うかもしれないが、時々そういう勘が言うものの多くは当たることを僕は知っている。

片倉と別れ家に帰る途中、余っていた陽を眺めると、ようやく夏休みが始まるのだな、と実感した。そして今年の元旦を思い起こすと、こんなことを望んではいなく、まして予期もしておらず、不思議でたまらなかつた。

「行こうぜ」

今日も片倉と遊ぶ。

一昨日も昨日も今日も明日も明後日も、夏休みの間は遊んで過ごす予定ではあるが、宿題があることは忘れてはいない。少しずつだが進めている。しかし片倉と会つと勉強会と称しても遊ぶ日は続いている。

そして夏休みが始まって、一週間が経つた。

この一週間の間に僕の行きたいところを片倉は案内をしてくれた。そして出歩いて知れば知るほど、自然の魅力に引き込まれて、さらに視野を広げるように興味も大きくなるのであつた。

前に僕の家で片倉と話した。そのことを実現すべく、片倉は連れて行ってくれた。

町から田舎へ、風が自由に行き来するが、陽をさえぎるものはなく、暑かつた。そして田舎道で汗を流し、遠くに見えた山のふもとまで行つた。さっきまでセミの声は遠くあつたが、こだまさえ聞こえてきた。

生い茂つた草は僕の背丈ぐらいあり、斜面は緩やかながら、そこ

から頂上を望んでも見えることはなった。まるで世界一高い山にさえも見える。

「はー、高いなあ」

「おう。この山はちまたじゃ有名だからな」

ふもとの弧に沿って自転車を走らせると、観光用なのだろう、登山口が見えた。その近くに自転車を止め、片倉は先に行った。荷物を持ち、僕もその後を続いた。

むっとする空気に、山登り。時々僕の前をよぎる虫に、さらにセミの声が左右から聞こえる。俺の声のほうが大きいぞ。俺の声が大きいぞ、と競い合っている。それらは僕の疲労の加速剤となる。

いくら観光用の道だからといっても、斜面を登ることは足にこたえた。

「ほらほらほら。早くしないと置いてくぞ」

片倉は身軽に次々と階段をのぼっていき、僕が見えなくなるぎりぎりのところに常にいたのであった。

よくよく考えると、僕は登山すること自体が初めてだった。よくテレビなんかで登山するのを見かけ面白そうだなと思ったことがある。しかしこの登山というのは何が楽しいのか、まったく分からない。暑いし、足は痛くなるし、疲れるし、いいことなんてない。

僕は息を切らしながら片倉の背を追っていた。その影に追いつくこと、それは山の中腹辺りに着いた頃だった。

「ほら、こっちだ」

片倉は僕を待っていたらしく、僕が追いつくまでの間、十分に休んでいた。

「まだあるの？」

「まだあるの。でもあと少しだぞ」

片倉はさらに、茂る道なき道のジャングルの向こうへと入っていた。った。

きつと僕は顔を曇らせていることだろう。

そのなき道に僕もしぶしぶながら、自分の責任を確かに感じてそ

の草を掻き分けて進まなければならなかった。

半そでで半ズボンなので、草の爪で引っかかれた。蒸し暑さが体力を奪い、中途半端な斜面が簡単に歩くことを妨げる。いつか倒れるだろうなと考えながら、するとこれは皮肉なのかなと思った。

そして歩くこと何分ともなかった。

きっとあれはそうなのだろうな。耳に流れるように入ってくる音は確かに水と水が激しくぶつかり合う音。

僕らは開けた場所に出た。急に涼しくなった。陽光が滝つぼに降り注ぐ幻想的な空間が目の前にぱっと開けた。洞窟の向こうは溢れんばかりの水源にたどり着いたわけだ。

「わあ……」

飛び跳ねる水しぶき。閑静で唯一の轟音を鳴らす一本の水柱。そして大きなアーチを描く虹。澄んだ空気が涼しく、照るように熱い頬を冷やすのだ。

きつと生き物たちの憩いの場なのだろう。

片倉は岩場をぴょん、ぴょんと飛んで、水場まであっという間にたどり着いた。

「おい、お前も来いよ」

僕はその超人的な、野生的な片倉に感服した。僕も同い年で同じ人間だと、不器用ながら岩と岩の間に足を挟まないように、傷を負わないようにして岩の上を、バランスだけを頼りに歩いた。水にぬれた岩に苔が生えていた。足の裏がぬるつと感触は悪かった。

遠回りすればこんな思いをしないで済むのだが、片倉の行動に惹き立てられた感情があった。童心とでも言うのだろうか。野生の心とでも言うのだろうか。ただ羨ましく、たまっていたものが急に溢れんばかりの力となって行動を示したのだろうか。

やっとの思いで着いたところに待っていた片倉はもう海パン姿になっていた。

「おっせえぞ」

そう言って片倉は岩の上から水面に向かって飛び込んだ。

飛び散る水しぶきを避けようにも岩の上なので避けられず、しかし冷たくて気持ちよかった。早速服を脱いで、片倉に続いた。

水面にぶつかる瞬間、それは未知な空間に飛び込む気負いで勇気がいるものだったが、それはすんなり体に浸透するようで、さつきまで嘘のように熱かった体は一気に冷やされた。しかしこのことはもう、初めての経験ではないような気がした。

飛び込んだ底はそこまで浅くはなかった。水面下を見てみようと水の中で目を開けてみる。底は浅いところがあれば深いところもあるらしく、水の流動もある中で明晰に目に映った。泳いでいる魚も小さくて、僕が近付くと岩陰に隠れた。

水から顔を出すと片倉は目の前にいた。

「どうだ？いいところだろ」

「うん。こんなところだとは思わなかった」

意外と広いところで、端から端まで泳いでみたのだが、それだけで疲れてしまった。そのおかげで一度岩に座った。

泉というような、それがふさわしかった。自然のエネルギーが満ち溢れて、確かに分かったことは、水で染みるはずの傷は痛みさえ感じていなかった。ここに来るまでに負った傷を見ると、急に痛みを感じるのだった。

片倉も僕のことを気遣ってくれたのだろう。僕の目の前まで来たのだった。

「どうした？傷が痛むのか？」

「ここに来るまでさ、葉っぱとかで切っちゃったみたいでさ」

急に片倉は笑い出した。

「そんなのつばでもつけてりゃいいんだよ。なに可愛いこと言ってるんだよ」

片倉の笑いは止まらないようで、本当に僕は傷が痛かったので、勝手に笑えばいいと思ったのだが、長くその笑いを聞いていると腹が立ってきた。

僕は無言で立ち上がり、そしてぐつと足に力を入れて、片倉の頭

めがけて跳んだ。

片倉はすぐに水にもぐったが、それもすれ違いで片倉の背中を思い切り蹴った。

そして僕はすぐに片倉からなるべく遠いところまで泳いだ。

「このやろ」

片倉が顔を出す頃には僕は対岸近くまでいた。しかし片倉も勢いよく僕の後を追ってきた。

ここで過ごした時間は覚えていない。だがこの後、滝の上から滝壺めがけて飛んだのは覚えている。よくテレビで見たことをやってみたかったのだ。大自然に住む子供たちは本当にこんなことをするのかと不審に思ったのだが、実際そうなのだと自ら実感した。

そしてもうこれ以上皮膚はふやけないだろうな、というほど泳いだ。

そしてそろそろ帰ろうかと片倉と話していると、茂みの向こうから見慣れた顔がぬつと出てきた。

「おい、片倉。なにやってんだ。もうここに来るなって言っただろう見たことある顔。それはあの駄菓子屋であつた奴だった。あの時と同様、脇に二人ついている。どうやら昆虫採集に来ていたようで手には網、肩からはかごをぶら下げている。なんともそれがおかしな状態だった。大きな図体に小さなこのアンマツチが僕らを水の中で窒息させようとしていた。」

「お前こそ、ここに何しに来たんだよ」

片倉は笑いをこらえて、大体の予想ができていながらも、どんな答えが返ってくるのかを楽しみでしようがないようだった。

「そんなの決まってるんだろ」

「俺たち、ここで泳いでたけど？」

「ん…もう、この水は使えねえな」

そんなはずがないのは分かっている。片倉も誘導しているのも分かる。脇にいる二人は顔をゆがめた。それは単なるたった一人のわがままだった。

「じゃあな。気を付けて帰れよ」

「何だと、こいつ…これでもくらえ」

せつかく採ってきたのである。カブトムシをカゴから取り出して、それをこつちに投げつけたのだ。そしてカブトムシは解放されたのだと思っただのか、空高く羽ばたいていったのだ。

「おいおいおい…せつかく朝から探したのに…」

脇の二人は本当に残念そうにしていた。

「うるせえ。こうなるとは思わなかったんだよ」

誰だつて投げればどうなる、そんなこと、分かるに違いない。実際、その脇の二人がそう言っているじゃないかと気付かせてあげたかった。

二人は切ない顔で男のもつカブトムシのいないカゴの中を見て、ただ放心状態でいるのが精一杯だったようだ。

「このやろ…恥かかせやがって…」

この泉に入ろうとする男に向かい、片倉は楽しそうに言った。

「ここ、俺たちは入ってるけど」

「…まあ、今日は勘弁しといてやる。今度会った時は、ただじゃおかねえからな…それにもうここに来るんじゃないぞ。ほら、行くぞ」
そういう前に二人はふらふらと茂みの向こうにいなくなってしまうところだった。男もその後を追いかけた。

「やっぱり、いい奴にしか思えないんだけど」

「そうか？変な奴の間違いだろ」

なるほどそのことも分かるが、それ以前に僕の心の中には曇ったものはなかった。

やつらがいなくなっても、僕らはもう少し泳いでいた。タオルなんか持ってきていたが、それを使う必要はなかった。しばらく岩の上に座っているだけで、暑い太陽の日差しですっかり乾いてしまうのであった。

ああ、またここに来るのはいつだろうかと背にした時も、冷涼なマイナスイオンがいまだに僕らを誘う。

だが誘いに乗ることはない。またいずれ、ここを訪れることを願うばかりだった。

ああ。なんで楽しい日々は早く進むのだろう。アインシュタインの相対性理論。前に父に教えてもらった。その時はさもと頷くことはできなかったが、今でもあやふやだが、なるほどなんとなく首を縦に振ることぐらいはできる。

しかしそのたった短い時間で育まれた友情はたかが知れたものではない。それは自負できる。片倉はそう思っていないかもしれない。なんて、そんなことは思ったことがない。それぐらいの自信はあらずとついてきていた。もともと僕の体の中にはそんな昨日が備わっているらしい。

そうであるから、たとえ遊ばない日があろうとも、きっと崩れない友情、それがあると信じている。だが今は夏休み。昨日も明日も明日も遊ぶに決まっている。

それにしても、片倉の家にまた来るとは思わなかった。というのは以前ここに来た時、片倉に出て行けと言われたきりだったからだ。しかしその片倉から、今度は来てなんて言われた。

あらゆる感情が交わる不思議な思いで、首をかしげるようなことがありながらも片倉の家に入った。

「くつろげよ」

そんなに部屋は変わっていない。しかし他人の家だというのに、何故か親しみを持つ。ゆったりと、くつろげるようなその環境は同化という言葉が似合うだろう。

片倉はまた同じような、僕はデジャブを見た。

なんとも和やかな。クーラーが効いた部屋で、窓を通して外が暑いのを眺める。セミの声が聞こえる。窓に虫が横切る影が映る。

この空間はどうやらゆっくりと時間が流れるようで、きっとそれは僕の気持ちが続いたりとしている証拠なのだろう。

それにしても、これはなぜだろう。居心地というのがまるで家と

変わらないのだった。どうしたものか。きつと家に帰ると言いつつ、このままここに居座りそうな気がした。

片倉は奥の部屋から戻ってきた。

「俺の家、何にもないだろ」

そんなことはない。さつきから気になっていたものはある。天井に雨漏りでできたのだろうか。隅に黒いしみがあつた。しかしそれ以外は何の変哲もない一般の家庭と変わっておらず、テレビもあるし机もあるし、その家独特のにおいもある。だがそれだけは何か異質なものには思えない。僕のかぎなれたにおいと非常に似ていた。ただいつの間にか、洗脳されたかのように意識は頭の上を危うく浮かんでいた。どうしてそのようになっていたのか。それほど難しい理由はなかった。

そういえばと頭にぱつと浮かんだものがある。片倉の絵だった。僕はそのことを片倉に要求してみたのだが、それは無駄な抵抗であつたらしい。片倉はどこかに隠しているらしい。押入れを探つていても、決して出てはこなかったのだ。するとその代わりとして出てきたのは野球盤だったのだ。

片倉はそれに目を付けたのか、僕を押入れの前から遠ざけて奥にある野球盤を引っ張り出した。

野球なんて知らなかった。ましてやり方なんて知らなかった。しかしその小さな球場で動く選手を、テレビで何回か見たことのある中継から想像を張り巡らして、できる限り動かした。部屋にぶら下がる電灯があまぶしい限りのライトで、きつとあの台所から聞こえる低い電子音が観客の声の代わりとなっているのだろう。そういう想像に気付いた時には、自分が恥ずかしく思った。

そうして次第に選手の残像は薄れていって、ただ楽しむものに変わった。僕の背中から熱は引いていった。

夢中になってやっていた。アパートの廊下を歩く人の足跡、当然そのような音は耳に届かなかった。そしてそれに気付いたのはようやく、ドアが開いた時だった。

「ただいま…」

女の人の声。その声には疲れたような、やつれたような、ただそれだけでまだ見ぬ顔は思い浮かべられた。

女は台所に向かい、換気扇を回した。

「誰か友達来てるの？」

「うん。そうだよ」

すると台所から女はやってきた。一枚扉を開けて、僕らを見ているのだろう。そして僕に目を向けた。

「こんにちは…」

「…こんにちは」

女はまだ火が付いていないタバコを指に挟み、顔は強張っていた。これが片倉の母親だろうか。髪は茶髪で、背の高いすらっとした細身の体。前に聞いたような話では、まるで年の老いというのは見せていないようで、おばさんというには失礼な気がするし、ましてお母さんというのはなおさらおかしい。

一人で戸惑いを表情に表さないように気を付けていたのだが、しばらく流れた沈黙はその場に不調和を生み出していたのは言うまでもない。

そこで取り持ってくれたのは片倉だった。それでその場は一段落着いた。

だがそれでおしまいではいけないと、何かが僕の心を咎めたのだ。つた。

目が合ったその時、何か本能的に、ポテンシャルのような、何かがぱつと目覚めたような心地、そして電流が体内を駆け巡り続け、終着地点が脳だったせいで身震いさえたのだった。

僕はしばらく片倉の家にいたわけだが、すると無性に家へ帰りたいくなった。そのわけは分からなかった。少し遊びつかれたから。少々騒ぎすぎて迷惑だと思ったから。隣の部屋に片倉のお母さんがいたから。

さもあらずとも、もう外は暗くなり始めていた。

そして僕はただ五歩の距離を歩いて顔を出して目を合わせるような勇氣はなく、壁を隔てて僕は呼びかけた。

それでは悪いと思っていたものの、それ以上のことはできず、それ以下のことも失礼だと思っていた。その中途半端な気持ちでそうさせたのだった。

「お邪魔しました」

霧がかった、もやもやとした心のまま気になることは家に帰っても晴れることはなかった。逃げるように帰ってしまつて、何だかやるせない。思い出すことをしたなら、かつと耳が熱くなる。

夕食時に父と話すこと。

「今日も片倉君とか？」

「そうだよ」

「本当に仲良しだな…よかったな」

空を眺めるように向こうを見るその姿勢は、ここにある空気を震わせて波長として伝達されるのが分かる。その空の向こうを、僕も見ているのだが、それは父ほど定かではないのだろうな、と思う。きっと大人になれば分かるだろうな、と思う。

それにしても、何所ともなく頭に浮かぶのは片倉の母だった。

その日眠るまで、この食事中も、風呂に入つていても、あまりの宿題をやつていても、僕が眠りに入るまでベッドの中でも眠気にさえ打ち勝つほどだったから、おかげで次の日の朝は目をこすりながら起きたのだった。

ただ、いまだに感じる心に宿る残り火が鎮火しそうなのを、少しでも長く、いやいつまでも残そうとランタンに移されるのだった。ひたすら油を差し忘れぬよう、時々頭の片隅にその一片を置いておく。

炎はゆれる。ゆれるのはきつと、時々風が吹き込むからだろう。

前編（後書き）

これからの参考になりたいと思いますので、良かったら感想をお願いします。よりよい作品作りにご協力ください。

後編

「少し、焼けたんじゃないか」

夏の終わりに言われたその一言。今日から学校だと家を出るその時だった。

父はようやく気付いたようだった。だが僕も気付かなかった。確認するように僕は自分の腕を見てみた。しかし夏休み以前の自分の肌の色なんて気にするはずもなかった。

そう考えれば父はすごかった。その些細な僕の変化に気付いていた。いや、灯台下暗しとは変な表現だと思うが、そのようなものだろうなと思った。

これから秋に変わるというのに、いまいち自覚はなかった。毎日見ている青い空に白い雲。それらが物語っていた。

家を出て、想像していたものはありのままであった。まだ暑さのこる生暖かい風が肌を触るのだが、やはり嫌な気がした。矛盾というわけではなく、ただ自分の中に新たに生まれてくるものがただ、知らずに構成されていた。

季節はきつかり変わると思っていた以前の考え方は毎回、ことごとく否定され続けてきた。しかし曲げずにいつまでもそうであるだろうなと思いつけてきたものが、不思議と折れてしまったのだった。片倉と共に過ごしてきた間、変わりつつあるもの、だった。

しかしそのことを知った自分は、遙か遠く、後の時分だった。

すると未だ、季節を狂わせるセミの鳴き声が、僕の体内時計を狂わせ始めた。決して心地よいわけではない。その地の裏にある気分は不思議と、名残惜しく思わせる、もうすでに遠き、はかなさを漂わせていた。

また来年。それがまた到来するのを知っていた。

今から待ち遠しく思えるのだが、ただそれだとそれまでの過程の密度が薄く思える。いつものようにひたすら、いや無我夢中でその

日を過ごせば良いのではないか。

何を考えているのだから。去年まで、こんなこと考えたことはなかったな。それが普遍で当然だったから。もうこんな時期だからそう思う。

気付かないうちに僕の底は深くなっていた。

「おい」

背後から声がしたので振り向くと、遠くにいる片倉を目にした。

片倉はすぐに追いつくと、横になって学校までの道のりを歩く。

そうしてまた夏休み以前の生活が戻るであろう。しかしそれ以上に刺激のある生活を願っていたのは間違いない。

秋には様々な催しがあるという。そう片倉は言っていた。

それが何か告げられずにただ心中に期待と不安を抱きながら帰りの先生の話に耳を傾ける。何かあるのか先に聞くのはそれ以前の期待よりも倍になる。膨らめば膨らむほど、気持ちも大きくなっていくのを知っていた。

それに片倉は先生の話なんか聞くはずもない。だから片倉がもったいぶって言っているのを聞くのが面白おかしくて帰り道、必死に笑いをこらえる。

片倉は面白いやつだなとつくづく思う。それになんでこんなにも馬が合うなんて、何かしら縁か、もしかしたら遠い昔の血縁があるのかもしれない。

そんなありもしない面白い妄想を一人で知らずにしている自分に気が付いた。

父にこんなことを話そうという気はしない。それはただ一人で持つ秘密であるような気がしたからかもしれないが、家に帰ればそんなことは忘れてその日に起こった出来事を話す毎日がある。同じ繰り返し。

その繰り返しと相反する以前までの僕の考え。その変化には気付

いた。それも新たな生活によるものなのだろう。

何かを予感をさせるような片倉の言葉。

しかしそれは明らかに分かるもので、予感でもないのだが、もしかしたらと期待を自分に持たせるためだった。

そしてその日はすぐに知ることになった。

「写生会です。これから…」

担任が言い出したことは大きく予想と違った。

写生会というのはこの学年の特有なもので、午前以外でスケッチをして、午後に色をつける。その過程が終わらなければ後は宿題となっている。

そして僕らは朝早くから集まり、学校を出てしばらく歩き、ある山の麓まで来た。まだ登ったことがない山だ。

それもそうか。夏休みの間にこの町の山を制覇したら、きっと本の一冊でも書けるだろうな。

それにしても片倉の足取りを見ているのは面白かった。スケッチの道具を上下させて、鼻歌を歌うような雰囲気醸し出し、後ろからでもそのにやけた顔が想像できる。

そういえば結局、夏休みの間もこの今までも、片倉の描いた絵は見ることはできなかった。だけど今日まで我慢してきてよかったな、と思う。

山に少し登る。みんな、やはり地元の人達で、疲れた顔一つしない。そして登りきったそこに、観光用のピクニックエリアがある。しかしそこは誰にも使われない。夏に訪れた観光客は登山家か、だが稀にキャンプで来る家族連れが遊びに来ていたのを見たことがある。

「あまり遠くに行くなよ。十二時に終わりだからな」

僕らはやはり共に行動した。

ピクニックエリアはあまり人工的ではなく、施されている箇所はわずかで、なるべく自然のままを、がコンセプトだそうだ。時々こ

ここにこの街のボランティア団体がゴミを片付けに来るという。だから常にゴミがなくて、むしろゴミを見かけるのが珍しいと片倉は言う。

そして片倉を先行に案内された場所。野原の見晴らしがいい場所だった。

「時々、この山には登るんだけど、今日はここで描くのは初めてなんだ」

早速支度をして、片倉は描き始めた。僕はどう書けばいいのか分からなかった。だからまず片倉の描き方を見てから描くことにした。片倉の手は器用にすばやくあちこちへ動く。それが驚くほど早かった。もう何が何だか分からなかった。まるでペンが一枚の画用紙の上で踊っているようだった。

そしてその景色は実際に観て分かる景観だから僕は感動をした。それなのは僕はどう丁寧に似せて描こうとしても、片倉よりも時間をかけようと片倉のように上手くはいかない。

風景は止まっているのに、まるで生き物のようにうごめいているように思える実は目の前に見える光景はすべて、動物なのではないか。地球上にある何かのエネルギーに動かされているわけではなく、自らの意思で自由に動き回る動物なのではないか。

時々そんな自明でないことが生まれては心にしまわれるのが繰り返される。そのしまわれた先で暴れては出ようとするが、そうすれば目の前の光景が描けなくなる。

僕はとにかく片倉のように描けなくても、昼までには描き終わるように専念した。そうして自分のことに夢中になり互いを気にしなくなった。

何度見ても変わっているような、目の前に広がる景色。それを必死に写し取ろうとするのだが、どうしてもうまく描けない。それは何度も見たことのあるような、似たような景色。イメージとして頭に残っているような気がするのだが、日が経つにつれて輝きは失われていく。この土地に馴染み、走り回ったせいで、すっかり目が肥

えてしまったせいだろうか。するとここに来る途中、つまりこの街に初めてやってきた時の様々な景色が思い返された。

そして手が動き出す。さらさらと進む。片倉ほどではないが、早く適当にスケッチをあと数分もあれば終わるだろう。いつの間にか夢中になり楽しくなった。

しかし何か嫌な予感がした。直感というか、背筋が凍る思いというか、肩をびくつとした。すると頭の上を覆う雲に気付く。

しばらくするとあまりに夢中になったせいで片倉がうなっているのに気が付かなかった。

「うーん…なんだろう…」

頭を悩ませている模様。

先ほどまですらすらと秀才がテスト解くように手が動いていたのにもかかわらず、それが止まり、頭を悩ませている。しかしその片倉の元にある一枚の絵は僕にとって壮観だった。

到底、僕には理解に及ばないことだと分かっている。こんな絵を描いているのに、悩んでいる理由が分からない。だから力になれない。そんなことは承知である。

なぜ悩んでいるのかなんて理解できない。僕にとってこの絵は十分すぎる。憧れである。別にこのような才能があっても決して不必要なものではない。むしろあつたら得するぐらいだ。

だが一枚の紙と対面して会話している片倉が放っておけなかった。見ていられなかった。それが一番適切に思えた。

すると僕はあることに気付いた。

「なんかさ…暗いね。全体的に」

単なる感想だった。

僕はただこのような雰囲気嫌だった。だからそれとはまったく反対の晴れた絵を描いていた。曇り模様が明らかに天を覆っていたのにも関わらずに。

「…そうか。そうか、そうか、なるほど…そういうのもあるのか」
片倉のイメージはどんなもの変わったのか。

すると消しゴムと鉛筆を用い、鋭いスピードで手を動かす。

その手が止まるまで僕はじっと、その行く先を見ていた。邪魔をしてはいけなような心地がして、ただじっとその手を眺めていた。もしそれを止めてしまったならば、もう二度とその続きを見ることはできない。それが見られないのはきつと残念なことで、将来まできつと悔やむことだと思った。

僕は一時たりともそれから目を離さすことはできなかった。

「できた……」

どうやら僕はその絵に見入っていたようなのか、自分でも分からない。ただボーっとしていた、といつてもしょうがないかもしれない。その絵に入るような感覚であつたのだ。いつの間にか現実からその中へ引き込まれていた。

「集まれー。もう帰るぞー」

そんな先生の声を聞いて、僕ははっと我に返った。

すると片倉は今までに僕に何事か話しかけていたようで、僕は何を言ったのか尋ねたが、片倉はむっとした顔になって立った。僕はくどく何かと尋ねたが、学校に帰るまでの道のりでも教えてくれず、その後も教えてくれなかった。

結局、僕は写生を終えることができなかった。それでも頭に焼き付けられたイメージですぐに描き終えることはできるが、それよりも片倉の言葉が気になっていた。それにボーっとしていた間、片倉の絵は目に余るほど見てはいないのを、家に帰って片倉の絵はどんなものかと思い起こしたら気付いた。

そういえば片倉は何に気付いたのだろうか。そんなことを考えたのは父と夕食をとっている時だった。今日のことをいつものように話しているとかかさず出てくる人。父は懸念しないのだろうか。

すべてを寝る前にまとめてから寝る。今日起こったことを忘れないように、といつてもそれは不可能だから、起爆剤だけを頭に取り留めている。これは父に教えてもらったことだった。

父は作家であり、それでアイデアを思いついたとしても決して家

に帰るまではメモしないそうだ。もし忘れてしまったなら、それはそれまでのもの。決していいものにはならないと父は明言した。

なるほどなと思い、僕もそのことを始めた。

父の真似から始めたことなのだが、あれからはや一年ほど経ち、日記の代わりになっている。しかし残っているものはここに来る以前の特に印象が濃いものと、ここに来てからのこと。

そして今日のこと。

後で分かることだったのだが、片倉の絵は展覧会に出されることになった。そして展覧会に出展されるまでの間、しばらく職員室前の廊下に張り出されることになった。他にも三枚同じく出展されるものがあるが、輝かしいものではなかった。

僕はそのことを帰りの会により知ったのだが、片倉は珍しく先生の話聞いていたらしく、僕の腕を捕まえては決して離さなかった。僕は引きずられるように家に帰ることになった。

だが後日、片倉のいないことを見計らっては職員室の廊下に行ってみる。そこには片倉が待ち構えている。

しかしある日、たまたまいなかった日があった。その日、初めて片倉の絵を見て、そしてフィルムにその絵を焼き付けた。フィルタ―に入れてこの先大事に保管しようと心に誓った。

「あの子のお母さん、失踪しちゃったんだって……」

「え、私は違う男と出て言っただけで聞いたけど……」

「あの子のお母さん、多大な借金をしていたみたい。それで夫になすりつけようとしたそうなのだけれど、失敗しちゃったみたいなの……」

親の中のネットワークは時々おかしい。

矛盾していると指摘したからといって直す理由などどこにもない。ただ無駄な想像、いや妄想を膨らましては勝手にその人の人間像を

成形し特定する。

僕の父は酒乱で、そして時には家庭内暴力を振るうそうだった。そして母は夜な夜な外に繰り出しては遊びまわり、ある薬を服薬しているのだそうだった。そういうことで積まれた多大な借金のせいで二人は別れて逃げ回っているのだそうだった。またの噂は浮気好きの父、昔に勢いで殺してしまった母。そのおかげで母は警察に未だ追われているのだそうだった。

無論、僕はそんな姿を見たことがない。

本来、父は家事ができる小説家。母は、あまり知らない。父は過去を話そうとしない。その理由は分からない。だから、もしかしたら、ある噂が当てはまるかもしれない。前にこんな母だったのかと特徴だけを聞いただしてみたのだが、父は強調して否定している。そういう噂をする親の子供はひどく影響を受けていた。

「お前の母ちゃん、犯罪者らしいな」

「人殺ししたのって、本当？」

こんな親を持つ僕だから、こんなことを言う子供の親はたいそう僕のことを哀れむのだそうだった。

かわいそうだから。そういう仲もあった。

引越した当時は普通の友達ができた。日が経つとそんなに仲が良くない人も声をかけてくるようになった。僕はその人と合わないなと察知していた。それが偽りの友達だった。ある仲のいい友達は僕から離れていくこともあった。そういう親の子供は何をするか分からないから、と噂を真に受け止めて子供に呼びかける親もいる。

根も葉もない噂は次第に大きくなっていくばかりで、面白くないことは起こる。自分の予期しないことはもちろんだ。

それからだった。僕が人をあまり信用しなくなったのは。そんな噂が流れ始めてからも変わらず付き合ってくれる友達もいる。しかし僕は訝しい眼差しを投げかけ、自ら離れるようになった。

正直辛かった。きつと相手も嫌に思うだろう。そして僕も自分に正直になれなかった。相手の気持ちを考えていたり思ったりするのも辛

かった。

友情を分かち合える時間を引き換えに、僕は違うものを手に入れることをできたのだが、その時に戻りどちらかを選択できるならば、迷わず前者を選択することだろう。

そしてそんな噂が広まりつつ、僕がそんな生活にうんざりするような兆しを父は察した時は決まって父は言う。

「そろそろこの生活も飽きてきたし…引越すか」

また、と転々と土地から土地へと移る。そんな生活も楽しくて、今ではすっかり慣れてしまったのだが、心は次第に黒ずんできた。

父は小説家である。転勤の必要はない。僕はその点、利点に思えたのだが、周囲にはそうは思えなかったらしい。

「何であるこの父親は平日にも家にいるのかしら」

「あら、知らないの？あのこの父親、失業したんですって。リストラよ、リストラ」

そんなはずはない。父はもとから小説家だった。少なくとも、僕が小学生に入る頃からは。

きつとこれは性質なんだ。噂されやすい体質なんだ。これはしょうがないことなんだ。

僕はそれをすべて負の連鎖と考えた。そうして僕を正当化させて、他の理由を考えなかった。これがすべて正しいんだ、きつと。

うまくクラスに溶け込むことができないまま、ついに運動会を迎えた。

運動に興味がなく、運動神経もないというわけではない。行われる団体によるダンスというのが気が気でなかったのだが、どうやら偶数学年はないらしい。唯一は全員リレーのような団体競技だった。

僕らはクラスに溶け込めていない。もし組体操のような団体競技があるならば、きつと阻害されるに違いない。そうに決まっている。

しかし全員リレーの練習もちろん他の団体競技でもそうなるだろうが、それとは別の障害でまだ堪えられた。

早く終わればいいのに。前日から思っていること。

来なければいい。そんな非現実的なことは考えることは無意味であることは分かっていた。

そうして迎えた運動会の日。なんとなく嫌な雲が空を覆い、しかし結局、終えるまで雨は降らなかった。延期しなくて良かった。朝からあまり気分が優れなかったからだ。

その運動会は田舎の学校でありながらも盛大であった。町の一つのお祭りといわんばかりである。そこに集まる人のテンションも高まり、開催された。

ただ徒然なるままに時間は過ぎていく。時々動いて、クラスの足を引っ張らない程度に活躍する。文句も言われなければ僕らは静かにいればいい。

他人事だが、みんな頑張っているな、と心は周囲の熱気と間逆に落ち着いていた。むしろ周りの熱気があるからこそこっぴりられるのだろうか。こんなことを考えていても頭に血が上って周りが見えていないからだ。

片倉と競技を見ながら話をして時間を浪費していた。

朝は雨が降りそうな曇りだったが、雲の隙間から太陽が覗く。その太陽の位置は僕の真上にあった。

僕らは以前から弁当と一緒に約束していた。父が朝早くから弁当を作ってくれて、それを父と一緒に食べるのだ。片倉の母は毎日仕事があるらしく、その件から見ると父の職業は家族にとって天職に思えた。

「こんにちは。今日はよろしくお願いします」

「ああ、こんにちは。たくさん食べてね」

今日の運動会のメインイベント、そう思っていた。

「そついえば片倉君、早かったね」

「ああ、はい…ありがとうございます」

いつも強気な片倉は恐縮している。そしておにぎりを食べた。

「これ、おいしいですね」

「ああ、ありがとう」

ぎこちないような。しかし結局は他人なんだから、いくら僕の家に来たってそうなんだな、と思った。

僕らは話をしながら昼食を食べるその時が楽しかった。そして僕は二人の様子を見ているのが面白かった。互いに気遣っている様子が。その点僕はその仲介役みたいなもので、最も立場が有利だった。二人のぎこちない会話に耳を傾ける。片倉は食欲に関してだけは遠慮がない。父を気にしているが、目を合わせないようにしていた。一方、父はというと、目でけん制はしているものの話の切り出しに困っている様子であった。何を話したいのだろうか。時々唇が動く、果敢な行動を見せる。

しばらく観察していると、父の不自然な様子に気が付いた。あの目はけん制しているようには見えなかった。いや、けん制しているのではない。あれは疑いの目だった。もどかしそうにしている。

僕はどうしようかと考えた。引導を渡すもよし、まだ様子を見るもよし。父の様子からと性格からすると、きっと切り出せないだろう。やはりここは引導を渡すべきか。

僕は口を開きかけた。しかし父の口から声は出ていた。

「そういえば片倉君。キミの名前は聞いてなかったね」

「創一です」

何気ない会話。そんなことなら僕に聞けばいいのと思った。

「これはついでなんだけど…キミの…」

父はその後の言葉を言わなかった。一瞬間の出来事なのだが違和感が漂うのを感じた。父は眉間にしわを寄せた。

「いや…やっぱいいや」

父は自作のおにぎりをほおばり、遠くを見つめた。

その横顔の父を僕は初めて見た。懐かしさと憂いに満ちた目。その時、言葉で言い表せないような感情が伝わり、僕の体に流れ込ん

できたのだ。父は何を聞きたかったのだろうか。

それを問いだそうとは思えず、そして後にも威圧を感じて聞くことはできなかった。父はその事柄はなかったかのように、いつも通りというマニュアルに従い、僕に接した。僕は驚き戸惑い、そしてさらに押し込めるものを感じた。

父は僕の考えることを知らない。しかし強い圧は忘れるように促していた。それは父自体が直接関わる力ではない。僕に流れる血が、それが僕の、いや父の本能だった。

強要に対して僕は隠すことができた。密かな信仰心というようなものだ。

父はおかしい。片倉の前だと何かと神経質になる。それは確かなことだった。また片倉は僕の家遊びに来る。そしてまた父はけん制を送る。

僕はその不思議な光景に疑問のみを持つことが許されていた。

そしてまたこんな光景を目撃する。僕は時々、片倉の家に行く。

それは逆の状況だったこと。僕はけん制を送られていた。

「どこだよ」

「分かんね。どこだろうな」

もったいぶったように言う片倉。

僕は片倉を引っ張り出して、展覧会に来た。ここに入選した片倉の絵もある。

「お前の絵があるから来たんじゃない。探せよ」

「いや…俺、興味ないから」

こんなことを言う片倉。

実は片倉は展覧会には興味があつた。この街に美術館は無いものの、だから街の展覧会や個展は非常に貴重な芸術の鑑賞の場だった。そして僕にいちいち展覧会に誘うよう仕向ける、非常に面倒くさいやつだった。

入り口からずらずらと並ぶ絵の数々。そしてそれを観に来た客。その多くはその絵を描いた本人と親。他にも暇な休日をつぶしに来た親子連れに大人、子供だけというのはなかった。

僕は一枚ずつ鑑賞していった。そしてそれに特に入りこんでいる片倉を認めた。心中が分かりやすい。

そうなんだろうな。僕らが長くこうやって友達をやっているのは。は。

「次、観ようぜ」

絵から絵へ、等間隔で目を移していった。そしてふと、片倉が遅れをとっているのに気付いた。片倉はある絵の目の前で足が止まり、釘付けだった。

「どした？」

「…いや…なんでも…」

全ての絵の下には作者名とタイトル、そして評価に応じての入選だの佳作だのと書いた紙が張り付いていた。

そしてその絵の下には、入選、だった。そしてこの展覧会の多くはその入選、である。六年生が描いた絵。まだ見ぬ海とのタイトルで、その絵はどこか見たことのある風景だった。この山に囲まれた街、それを海に見立てて、さらにこの山のどこかにある滝、それを合わせた絵。滝から流れ出した水はこの山に囲まれた街にたまり、魚が悠然と泳いでいる様がある。

もの惜しそうに片倉は次の絵を見るが、やはり前の絵が気になるようで、チラチラと流し目で鑑賞していた。

それなら堂々と観てしまえばいいのに。

そしていつしかはその絵からはどんどん遠ざかり、ついには背中を反らして顔の位置を後ろにしては得意の流し目。

しかしそんなことも意味がなくなった時、ついに片倉の絵にたどり着いた。

「ほらほら、あったぞ…おいおい、審査員特別賞だってよ。良かったな、お前」

「ああ…」

以前学校で見た姿とはまったく変わらぬ堂々とそびえる山々。美しい光景だった。

絵もよければ賞もいい。しかし片倉の様子は異なものだった。歓喜、それがこの場にふさわしい行動のはずだ。それに対して片倉は表情にそのような要素が一つも見当たらず、むしろ元気が無いようだった。意外なことでむしろ驚いているのだろうか。

「どうした？」

片倉は一度僕と目を合わせたのだが、何も言わずに自分の絵に向き直った。そしてきびすを返してあの絵の前まで向かった。僕もその後についていった。

しばらくそれを眺める片倉は口をゆっくりと開けた。

「なあ…俺、これでいいのかな？」

「何が？」

片倉の意図が見えない。顔からも読み取れない。こんなこと、初めてだ。急に僕の心が冷めていったような気がする。

また沈黙が訪れた。周りに人はいるものの、ここは僕と片倉だけの空間だけに思えた。僕は必死に考えた。片倉の言いたいこと、この隙に答を導き出そうと思った。

僕がその答にたどり着く前に片倉は言った。

「この絵、どう思うよ、お前は」

僕はいったんその言葉について考えた。こいつはこの絵だけを評価した場合の意見を求めているのか、それとも片倉と比べた時の意見を求めているのだろうか。

いつまでも黙っていると変な目で見られると思ったので第一印象を述べた。

「独創的だな、やっぱり。絵というよりも芸術だもんな」

「…お前もそう思うのか」

片倉は親身につぶやく。重い一言に僕には思えた。体が重くなっただかと思うと、不思議と体が持ち上がるように軽くなった。

「俺な、絵が好きなんだよ。だから昔からあちこちの山に登ったりしては絵を描いていたんだよ。これを写そう。これを描こうってなうまいな、て言われんのがすごく嬉しかった。だから夢中で描いたんだ。けどな、なんか息詰まった。突然にだ。なんか、うまく描けなかった。分かんなかったんだ。悔しかったんだけど、人の絵を見るようになったんだ。それでもよく分かんなかったんだ。だけどこの前の写生会にな、お前に言われて気付いたんだ。俺に足りなかったものをな…」

それは何か分かっていた。ただ片倉の絵がそつけなく、面白みに欠けていたことを単に指摘したまでのこと。そう、僕は素直に自分の思うところを述べたまでだった。ただの感想に過ぎない。

片倉は続けた。

「俺な、将来、画家になりたいんだ…まだ伸ばしたいんだ、俺の可能性をさ…それにもし一番楽しいと思えることができるなら、一番いいよな…」

それはそうなんだ。それはもつともな事なんだ。誰もが望むことなんだ。

前にこんなことを父に聞いたことがある。父は小説家になるために睡眠時間を削り休日を削り、安月給で仕事をしていた。そしてその過程で結婚をしたが、母は僕が生まれてまもなく交通事故により他界したと聞いた。その逆境の中で書き続けた小説が大成したのだそうだ。

口だけではどうこうと言えるが、そう簡単になれるものではない。それなら誰でもエジソンだ。しかし片倉の言葉にはそんな軽いものではない。強さと決意が込められていた。

だから自然に僕は片倉を信用していた。もちろんそれはもとよりのことだが、それとはまた大きく違うものだった。

僕は絵を見つめる片倉の横顔を見た。体の中心からこみ上がる何かを感じた。

「…できるんじゃないの。気付いたんならまだ伸ばせるよな、きつ

と」

「そうかな…」

「お前が決めたことだろ。やれよな」

片倉は絵から目はずし黙りこくった。

「きつとできるよ。僕も手伝えることがあればやるよ」

「…うん」

その空間をそつと包むように外部の音がぱったり遮断されて、僕らはまたその絵を眺めた。きつと、こんな、いやこれを超えて見せようと片倉の意志が以心伝心伝わってきた。片倉はきつと、いや僕らは成し遂げてみせる。

秋はさつぱり山々を包んでしまい、様々な彩をつけてドレスアップした。どこからの景色も鮮やか色とりどりだった。

長期休暇に旅行に行かず、都会育ちの僕にはこんな景色はテレビを通してでしか見たことがなかった。

その山林を片倉と駆け回り、紅葉狩りや落ち葉を集めては飛び込んだりした。まるでふかふかのベッドのようで、それは飽きなかった。赤とんぼを追いかけていると、夕陽が落ちるのが早く感じられた。僕らは夕焼けに染まって、稲穂揺れる中、あぜ道を通って寒くも感じられる秋風を背に帰路を急ぐ。

毎日は学校が終われば本当の一日が始まるような心持ちで、そんな時間も過ぎるのはあつという間だった。気付けばひらひらと一片雪は大地を覆い、そして一面真っ白な銀世界を作り出した。あれほど美しく映えた木々も落葉し、山は雪山となった。

僕らは深々と降る雪の中、雪だるまを作り、そしてかまくらを作ろうとした。それは作ろうとしたまで。屋根の建設中に崩れてしまったからだ。そりを持って山を駆け上がる。前方に気がないことを確認して二人でそりに乗り、一気にすべる。

この時期はまったく車は通らない。除雪車は田舎の道など通らな

い。誰もいない広い平野は子供たちの絶好の遊び場だった。

しかしそんな日もいつかは過ぎてしまうのだ。時間はとどまることを知らず、一刻を刻む。

時計の時刻を見た。年は越していた。今年もコタツの中で温もりながら父とテレビを見ていた。そして朝には初詣に行き、近所の神社を参拝し、立ち並ぶ屋台を眺め練り歩くと片倉と会った。片倉も僕らと同様で、その後は共に行動した。片倉の母親はいなかった。年末疲れて寝ていると片倉は言った。

それはあつという間に迎えた。学校が始まって、時々雪が降る。その雪が降った時、ある手紙を受け取った。三回目の授業参観に関する手紙だった。

以前、二回のうち初めの授業参観は父が仕事で来ることができなかった。次の授業参観は来てくれたのだが、片倉の母親は二回とも来なかった。

僕は気になって片倉に聞いた。もしかすると、今まで来たことがないのか、と。

片倉は答える。

「そうだな…そういうば、ないな…」

来てほしくないのかと言った。

「いや、別に…何て言われるか分からないし、きっと本人も分かってんだろうよ」

本当にそうなのか。僕はそれらすべてが、詭弁に思えてならない。僕は片倉の意思を知りたかったからだ。そう思いたい自分がいたのかもしれない。

しかしそれはさらに奥地に踏み込むことになるような気がして、なかなか言い出すことができなかった。片倉の家の関係は僕には関係ない。だが僕は片倉の友人であり、親友だと思っている。だからなのだ。悩む必要があった。

帰りに一つ、言ってやることにした。

「授業参観にお母さんとか、見てきてほしくないの？」

片倉はまた同じことを言った。

「いやいや、そういうことじゃなくてさ、おまえ自身はどうなの？
来てほしいの？」

片倉は首をかしげて、頭をかいて、唇をかで、することを全てやりつくしてしまったようで、ようやく観念したかのように口を開いた。

「俺は…来てほしいよ、それはさ。一回ぐらいはさ…俺が学校にいる間はさ…」

「それだったら言えればいいじゃんか。今まで来てもらったことないんだろ？」

「そうだけど…言いづらいんだ、何事もさ。ほら、俺の家、貧乏じやん。おふくろ、頑張ってるしさ、俺がワガママなんて…だめだと思っんだ」

僕は片倉の家が貧乏であることを知っていた。だからきつと、片倉は迷惑をかけたなく、むしろ協力したいという気持ちも分かった。だが自分を尊重しなすぎだとも感じられた。

片倉はきつとこれから先、後悔すると思う。これがきっかけで母に負担をかけて、または人間関係に大きな変化があつて人生が崩れるか、片倉の意思を抑えてこの時の自分に対して悔やむのかでは、前者は当然ながら未定である。しかしその代償は大きく思えた。そんな些細なことで大げさな、だがこれがきっかけで片倉の欲望は大きくなるかもしれない。そして大丈夫だろう、まだ大丈夫だろうと無理をさせたなら、いつかはそうなるだろうという仮定である。

しかし片倉に限ってはそんなことはないと思っていた。こんな勝手な先入観に違いないが、ただ後は片倉の意思である。この二つの選択肢を片倉が選べばいいのだ。

「でもさ結局、お前次第だろ、やっぱりさ。多分お前、まだ一度も授業参観のことなんて言ったことないだろ？」

「…まあな。手紙は出してるけど、見てないフリしてるみたいでさ…」

「来てほしかったら言うべきだよ、絶対。本人も知りたいと思うよ、お前の気持ち。いくら家族だって、言わなきゃ分からないことってあるもんな」

「そうかなあ…」

片倉はうなり、首をひねった。その場では答えを導き出すことができなかったようで、それきり別れ際まで僕らは一言も話さなかった。

だがその帰りの小さな背中を見てみると、ますます小さくなっていくのが分かった。

コタツの上には手紙。それを見つめて考えていた。歩いていてもこうやって座っていても答えは出なかった。

一度しりを持ち上げて台所で口に水を含んだ。頭がすつきりしたら、もしかしたらポツンと立っている何かがあるかもしれない。今必要なのは答えだった。自分で決めることはできなかった。

コタツに戻り、また座った。今度は考えることをやめた。のほほんと体を温めていた。

するといつも通りの時間にドアが開いた。

「ただいま…」

いつものように疲れ果てた声。

コタツの中から手を出して手紙に手をかけた。だがそれは遅かった。居間の引き戸が開いた。

目が合い、手が下がる。またコタツの中に手を戻した。

「何それ？」

寒いとおぶやきながら座って、手をこまねきながらコタツに入った。手紙を手にとった。

「いや…ちよつと話があるんだけど…」

驚いたような表情。まるで眉を読むような、強い眼差しを向けられた。

「…それでね…あの…それ」

手にした手紙。眼光はそれに移る。

一瞬の間だった。続きを言おうとしたのだが、耳にした声は違うものだった。

「そう…今回は考えておくわ」

違和感が漂った。声質が普段と異なるものを感じた。心に霧がかって、もやもやしてならない。しかし後から突撃されてなお、残る多い足あと。

「ああ…そうなんだ」

もうどうしようもできないような気がした。頭の上に浮いた泡をつかみたい気持ちだった。

いまだ冷えた手をコタツから出すと、台所へその背中中は消えていった。

「それで言ったの？」

「それがさ…分からねえんだ…」

片倉は深刻そうに白いため息を吐いた。

前日また雪が降り、道端には積もった雪がうつすら残っている。

空は曇天、未だに降る予感を漂わせる。車は朝早くから走っていたようでその足あとを残していた。

「それって、どういうこと？」

「先に言われちゃったみたいで…考えてくれるってさ」

「そうなんだ…」

片倉の口からは答えは聞くことができなかったのだが、なぜか僕の心は穏やかに安心さえ感じていた。

「大丈夫だよ、きつと。来てくれるよ」

「そうかなあ…」

顔が曇り続けている片倉を横に、僕は空を仰いだ。

今日も寒かった。また雪が降らないかな。

僕は雪が好きだった。今までは遊べるから楽しいと思っていたのだが、もう一つの一面を見つけたのだ。もう一度あの景色を見たかった。

今日の積もり具合としては浅かった。これではすぐに解けてしまうことが分かる。冬休み中に一度だけ大雪が降ったことがあった。

その次の日、僕は片倉について行って山に登った。辺りは積雪がある。木の天頂から木々の合間にも、一面満遍なく敷き詰められていたように白く光っていた。変わってその日は晴天で、しかし雪は解けようとはしなかった。片倉は言った。踏み外すなど。時々深く積もっているところがあるようで、そこを歩くなということだそうだ。天気は晴れ、しかし木に囲まれたそこは身が震えるほど寒かった。そんな思いをしながら頂上まで上った。

まったく違ったのだった。夏や秋と同じところで見た景色、ただきれいという言葉では収められなかった。たった一色の色で染められて、ところどころ星のようにまぶしく光る。

それがもう一度見たかった。今では木の上にはちょこんと帽子のようにかぶるだけ。

「また雪降らないかな…」

「えっ。昨日降ったじゃん、夜にさ」

「いや、もっとだよ。背丈ぐらい」

「そんなことになったら埋まっちゃうし、学校にも行けないし…」

片倉ははっとしたような、目をぱちぱちと見開いた。

「…そうだな。それぐらい降っちゃえばな」

僕は道端の雪をすくった。それを丸めて、片倉にむかって投げた。粉みたいな雪でなかなか丸められなかったのだが、小さいながら片倉めがけて飛んでいったのだが手前で墜落した。

しかしそれにも気付かないで空を見上げたままの片倉が立っていた。

その片倉の頬に雪をつけてやった。

「つめたっ…なんだよ、こいつ」

片倉は道端の雪をすくうと、丸めて投げた。僕は逃げなかった。案の定、その雪は僕の足元に落ちた。

僕は一目散に、雪道に滑らないように気を付けながら学校に向かって走った。

片倉はまた道端の雪をすくうも、もう僕と片倉の距離は十分に離れていた。その距離は学校に入るまで縮まることはなかった。

あれからこの日まで、時の流れは早く感じられた。今日まで晴れが続いて、雪もすっかり解けて道が広く感じられた。太陽が掃除してしまっただ。

もうあの雪は見られないのかな。また来年のかな。

そう思うと無意識にすんと肩を落とし、ため息が出た。

しかしその反面、今日は楽しみの日でもあった。後はその時を待つだけだった。隣で片倉の背中にはわなわな震えていた。

「どうしたんだよ」

「いや……ちよつと……な」

片倉の気持ちは分からなくもない。だがこれだけは確かな確信はなかった。きっと僕の想像以上なのだろうが、もしかしたらが更なる恐ろしさが片倉を襲っているのかもしれない。

まもなく始まるのである。

本当にあれは片倉の望みだったのだろうか。今になってはこんな様子、僕は気の毒に思い、余計なことをやってしまったのではないかと後悔さえ感じた。

この日まで片倉の様子はおかしかった。あの日からだ。おかしかったのは様子だけではない。近寄り難かった。これほど言葉を交わすことがうまくできなかったのは初めてだった。

その間に、僕は孤独を思い出した。たった一人でいたあの時、家に帰るまでが、まるで時間が止まっているようで恐ろしかった。あの助けを誰に求めればいいのか分からないで一人ぼっち、孤独を味わう虚無感。もう二度とは味わいたくなかった。

僕は今日、いまだ朝の挨拶のみを交わしてそれっきりだった。こんなに近くににいるのに、これほどもない距離を感じていた。先生が黒板の前に立った。

「では、これから授業を始めたいと思います。日直」

起立のついでに僕は背後をのぞいた。父は来ていた。母親だけの中に父はうまつていた。しかし他の父親もわずかながらいた。右から左へ見てみたのだが、片倉の母は見当たらなかった。

そうして授業参観は始まった。

いつものように淡々と授業を進める先生。それにも関わらず土気が上がるクラスメイトたち。手を上げてははつらつと答えていた。その空気から外れて僕は片倉のことが心配だった。片倉をチラッと見てみると、なんだか安堵の表情を浮かべ、口元が笑っていた。そして後十分で授業は終わろうとしていた。教室の後ろ扉を開ける音が聞こえた。僕はまたのぞくように見た。父だった。

急いでいるようで、しかし殺気立っているようにも見えた。

荒々しく扉が閉められて、皆の肩が一斉に反応した。

耳が急に熱くなった。突然の不可解なことにつばを飲み込んだ。首筋をなでてどうにか自分を落ち着かせようとした。手が震えていた。周囲の目が気になった。僕は目を伏せた。

先生もしばらくの間、呆気にとられていた。動くはずのチョークが止まっていた。後ろで小さく騒ぐ保護者たちは口に手を当て、隣と見合わせる。

教室前の廊下を通り過ぎて、誰かと話して、さらにその音と声は遠くへ離れていく。

この状況を打破したのは先生だった。我に返ればチョークの音でまた全員を注目させるなり、続けて説明をした。

僕は授業よりも父のことが気になり始めていたのは言うまでもない。唯一の救いは残り少ない授業時間であるということだ。

片倉の視線がゆっくりと頬に当たるのを感じ、うつむいた。もう父のことしか考えていなかった。父の不可解な行動に疑問符を頭の

上に浮かべながら悩み苦しみ、四面楚歌を味わうような気分だった。
「…では、今日はここまで。日直」

そうして終えた授業参観だが、不穏な空気が教室に残ったままだった。

僕はそつと教室を出た。父の向かったほうへ歩いた。しかしどれだけ歩いてもその姿はなかった。帰ったのだろうか。

廊下には父母が溢れ始めた。その中に父が混在していないかを慎重に確認しながら歩いていたのだが、男の人だけを探すのには困難はないのだが、どこにもいなかった。

僕は来た廊下を戻った。

父はどこへ行ったのだろうか。何をしに途中で抜け出したのだろうか。

その帰り道だった。片倉と肩を並べて帰る道。

それは唐突に、片倉は口を開くのだった。

「お前の父さん、どうしちゃったんだろうな。なんか急ぎの用でもできたのかな…」

そんなことはなかった。僕は出てくる前に確認した。父は昨日までにすべての仕事を終わらせたとばかり言った。しかしそれも嘘なのかもしれない。それはないと自分のことの中でつぶやく。父は嘘が大のつくほど嫌いだった。だが嫌いな人をいざ重要になってみると、起用する事だってある。

心の中で葛藤が始まった。こんな結論、どちらでもよかった。

いざこざをしている僕をよそに片倉は続けた。

「あーあ、なんか…無駄な気、使っちゃったなあ…」

争いはいまだに続く。しかしその声はすっかりと僕の耳に届いていた。そしてそんなことさえも忘れてしまった自分を思い出した。代わりに忘れるものがあつた。

「そついえばどうしたんだろうな。来てなかったじゃん。本当に分かってたのか？」

「…多分、そうだと思うけど…」

「曖昧だな…お前」

二人とも黙り込むような形となって帰る帰り道。いつも通りの道をいつも通りに帰っていたのだ。そう、いつも通りだ。そのいつも通り尽くしの道である一つの不自然な光景が見えたのだった。どういう経緯でこのようになってしまったのか。

喫茶店で父と片倉の母と一緒にお茶をしていたのだった。

片倉は気付いていないようなので、肩を軽く叩いて指を指す。その方向に視線を向ける片倉は仰天した。

「なんで…？」

二人は顔を見合わせて同じ言葉を言った。喫茶店の窓をじっと見つめていた二人。

二人は深刻そうに話しているようにも見え、はたまた喧騒にも見えた。それは互いの眉も口元も吊り上っていたのだ。目は血走り、強い眼光で互いににらみつけていた。そんな状態なのにわずかに口は動いていただけだったが、ガラス越しでも力強さが伝わってきた。しばらく口論を展開しているらしかった。すると父は何かを取り出して机の上に置いた。あれは千円札だ。伝票の上に置いたらしかった。父は席を立った。

僕らは急いで店と店の間の路地に駆け込んだ。壁に張り付いて胸の鼓動は高鳴るばかりだった。

カラン、コロンとドアが開いて父は出てきた。そして狭い路地の間を気にもせずになんと目の前を過ぎていった。

「なんだったんだろうな」

僕と片倉は目を見合わせた。

「分からねえよ…何なんだよ…」

父が遠くに行ったことを確認すると、道に出て父の後姿を見た。すぐに角を曲がっていなくなった。

一方、喫茶店に残る片倉の母は思いつめたような目で、伸ばす手はティーカップに。一口飲むと落ち着いたようで、目をつむった。

次の瞬間だった。あるまじきものを見たような気がした。あれは一筋、涙のように思えた。

もし涙なら、泣く意味はなんだろうか。父に泣かされた。父にひどいことを言われた。それなら父との関係はなんなのか。父となぜここでお茶なんかしているのだろうか。

「ほら、行こうぜ」

片倉に早くとせかされる。母のことに気付いていなかった。

「…ああ」

僕もそこから立ち去りたいと思っていた。そこに居続ければ見るものはただ一つ、それだけを見ているような気がする。僕はそういう人を見るのが好きじゃなかった。自分も影響を受けやすいのだ。そんな気分を味わいたくなかった。

僕らは各々の家に向かって走った。

僕はどうしようと考えた。

父はいつも通りに台所で自慢の腕を振るっていた。

あまりにいつもの日常と同じように振舞うので異様に思った。現実の裏側、夢を見ているようで、いつもいたいと思っている空間なのに今はなぜか脱出を望んでいた。

僕は好奇心と興味で押されるとどうしてもやらすにはいられなかった。

父はテーブルに食事を並べ始めた。

僕は席につき手を合わせた。そして食べながらいつ話すかと迷っていた。今、話すか。まだ、もう少し経ってからか。いや、やはり食べ終わってからだ。そうすればいつだってその場から脱することができる。

音沙汰もない会話が終えると父は食器を片付け始めた。

後は決断を自分で自分に見せるだけだ。

「父さん…今日の授業参観、どうして途中で抜けたの？」

父は一時体が止まったのだが、すぐに再び食器を片付け始めた。

「ああ…あの時は、悪かったな。ただな、いいことを思いついたんだ、アイディアが」

父は動揺する素振りも見られなかった。声質も変化はない。

「そうなんだ…」

僕は流しに食器を片付けに行った。その時の父は微笑んでいた。

流しにたまった汚れた皿に手をかける。

「頑張つてね。仕事」

「ああ…」

父は照れながら完璧な演技をして見せた。

しかし疑問を持った。父は嘘が嫌いなはずなのに、そんなに隠したいことなのだろうか。それとも僕に言う必要がないからか。それだったら教えても構わない。それなら隠したいことか。あの二人の接点は何なのだろうか。せいぜい僕らが友人であることが唯一だろう。それ以外にプライベートで二人に関係があるのだろうか。

僕はここにはいられないと思った。父の嘘は見たくなかった。笑っていても、それが残酷で恐ろしく、不気味さを感じられたからだ。背筋が凍り、ゾクゾクと気持ち悪さを予知した。

複雑な気持ちだった。急に父が遠くの存在になってしまったかのようになり、かつ次第に離れて、それが現実のものとなりそうで、なったことを想像してしまい頭が真っ白になる。

疲れてもないのにぐったりとして、今日は早く寝たかった。だが今日は寝れないなと思った。頭の中に残り続けるものを処理するまで、すべてを片付けるまでは頭を圧迫してし続ける。

そんな気力はない。もう時にまかせて寝そべっていた。

何日が経ったか。それから片倉ともそんな話でずっと、片倉も僕と同じようなことを言ったらしい。

来なかったわけではない。教室の前まで行ったのだ。凍りつく空気を味わいたくなかった。だけど一目だけは見たかった。

だが片倉もそれ以上は追求できなかったのだ。

父の不可解な行動は続いた。休みの日になれば決まって外に出るようになった。買い物や仕事関係でなければ出ることはなかった父が財布だけを持って出掛けるのだった。

一度その後を付けてみようと考えたが、父でも誰でもない何者が僕の足に緊縛をかけた。

どんなことをしても僕は父のことを知ることはできなかったのだが、片倉から聞いた話は僕にとつての耳寄りな情報だった。

また父と片倉の母は会っていたのだった。今度は違う喫茶店でまた話して、その様子は前と同じだったと言う。

僕はついに決意してその現場を見に行った。

片倉と待ち合わせてすぐに移動した。自転車で町中をかけまわって喫茶店を巡った。片倉の情報によると、喫茶店を転転しているようだ。多分、その店の人に不信さを抱かせないためだと思う。そしてまだ行っていない喫茶店を片倉が先導で巡り巡った。しかしすべての店の窓からのぞいては見たが、どこにもいなかった。僕は諦め始めた頃だった。あの人影はお前の父さんだと片倉は言った。僕はその片倉の指先の方を見てみると、確かに父を認めた。すると僕の頭には急に一つのことを思いついたのだった。僕は無我夢中で自転車をこぎ始めた。片倉は待てよと言いながらついてきた。僕は先回りをしたかったのだ。角を曲がり、曲がり、きつとあそこで落ち合うだろう。僕はスピードを緩めた。

「あ、父さん」

僕の額には汗が滴り始めていた。僕と父が目合った時、父は罰の悪そうな顔をした。

「どこへ行ってきたの？」

「おい、どうしたんだよ…あ、こんにちは」

片倉はようやく追いついてきたようで、僕はこれが目当てだった。案の定、父は片倉のほうを見て顔をこわばらせた。

「あ…ああ、こんにちは」

父は明らか作り笑いで、恐ろしく静かに言った。

これですべてが解決すると思った。父のことは分からない。だからこれが一番手っ取り早いと思った。もしも片倉と会えば、きっと何かぼろを出すだろうと思った。

「それで、どこへ行ってきたの？」

「ああ… ちょっとな… 小説の取材に行ってきたんだ」

そんなことを言う父なのだが、僕は一つのこと気が付いた。ほのかに鼻をつつく、コーヒーの香り。父から香るのだ。小説の取材に喫茶店へ、と考えてしまえばこれは指摘しても無駄だろうと考えた。

それで僕は考えた。父の言うことは詭弁だった。

「どこへ行ったの？」

僕は繰り返した。

「え… だから取材にだが…」

「だから、場所。どんなところに行ってきたの？」

僕があまりに食い下がるので、父は不審に僕を見たような気がした。

「ああ、それは秘密だ。そういう主義でな」

そういえば父は小説を書く過程において、すべてのことを秘密にする不思議な癖みたいなものがある。絶対に外部に漏らさないし、知られたくないものだから、僕が用事で父の部屋に入ろうとすると怒るのだ。それは僕も分かって、今では十分に気を遣っていた。

僕の次の言葉は出なかった。すぐに思い出したことが少し遅すぎた。

すると父は思い出したように言った。

「あ、秀二。ちょっと話があるんだが… いいかな、片倉君」

片倉は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。

「あ… はい。すみません」

どうして謝罪の言葉が入るのか分からなかったが、父は気にしない様子で言った。

「そうかい、すまないね」

「いえいえ、こちらこそ」

片倉は僕をじつとみつめると、じゃあと言い、父に軽く会釈をしてからその後はあつという間だった。

父と二人きりにしてほしくはなかった。父に取り込まれそうで、呑み込まれそうで、それ以外でも何だか怒られそうな気がして恐怖を覚えた。僕は背後に父の存在を寒気がするほど強く感じた。

「秀二、帰ろうか」

父は優しく言った。しかしそれは僕にとっての追い討ちだった。

畏怖を感じながら、僕は自転車を転がして父と並列で帰ることになった。父は何も語らず、そして家に着くまで均衡は破られなかった。

僕はその閉鎖空間がたまらなくて息苦しかった。首を絞められる思いをじつと我慢していた。

父はドアの鍵を開けた。ドアが開いたのだが、どうしても異様でいつも見慣れているものとは異なっていた。

父に続いて家に入ると、父は突然に言った。

「今月で、引越すことになった」

今の僕にとって最もかけ離れている言葉。そして僕にとって最も縁のある言葉だった。

血の気がさあつと引いた。頭の重さがずっしりと感じられ、後ろに糸で引つ張られてそれに抵抗する。つばを飲み込む。あれ、聞き間違いかな。一度は耳を疑う。しかし再認証を行うと、それは確かに引越すという言葉であった。それを否定したくて、間違いであるかと思いたくて頭の中から引き剥がそうとするのだが、隙間にずり入り込んでしまってもうどうしようもなかった。だが抵抗は続いていた。

「今、なんて…？」

「去年と一緒だ。三月にまた引越す。引越す理由ができたからな」

それは確かに引越す、だった。こだまのようにあちらこちら、

体の中で反響を続けると、体が震えた。

そして頭にフラッシュバックのように甦ってくる記憶。この思い出に成り果てた記憶らは僕のものだ。そしてまたここに同じようなものを並べるんだ。僕はそう思っていた。

「いやだ…何で…なの？」

僕の心は震えていた。訳も分からずにこみ上げる感情。そして熱い涙が頬を滴った。

「…諸事情だ。しょうがないだろ」

父は厳かに言い残すと書斎へ入っていった。僕だけが廊下に取り残されたままで。

立ちすくんでいることも忘れて僕は父の書斎のドアを見つめた。考えていることはなかったと思う。自分の無力さに絶望していた。今までが自分の都合により引越してきたのだから、もちろん父の都合も聞き入れなければならぬようなことは分かっていた。むしろ子供の自分が勝手気ままにあれこれ言うことではないし、今までが勝手気ままだった。

父の単なるワガママかもしれない。だが振り返ってみてもワガママなんてない。それに僕が父にやってあげられたことなんて、この人生で何も無い。僕がもしここで反抗して父の迷惑になるようなことがあったなら、僕はただの親不孝に違いない。

だけど、僕の気持ちはどうなのか。それはしっかりと固まっている意思。それを覆さないといけない事実。そうしなければならぬ事実。無条件でも受け入れないといけない事実。

しかし僕は目を赤く腫らして、靴を履いて思い切りドアを開けた。後ろからドアが開くような音が聞こえた。そして声も聞こえたような気がした。

僕は走っていた。無我夢中で目の前が涙で見えない時もあった。涙をぬぐい、足元に気付かず何回もこけそうにもなった。途中で疲れて止まりたい時も休まずに走った。僕には行きたい場所があった。もし止まることがあれば、もうそこにはたどり着けないような気が

した。そして足はきびすを返して家に帰ることだろう。

その道、僕を妨げるものは一切なかった。

息を切らして階段を上った。そしてある部屋のドアの前に立ち、呼び鈴を鳴らした。なかなか出てこないものだから指はあせっていた。

「何ですか…あ、お前か…どうしたんだ？」

真っ赤に腫らした目でがくがくした足。息も激しくて、片倉に会ったことより安心してしまつて、またぼろぼろと涙を流した。

片倉はどうしようもなく、あたふたと戸惑っていた。その時だった。奥からのっそりと出てきた女の人。

「…どうしたの？」

片倉の母だった。頭を掻いて出てきた女性は今まで寝ていたようで、髪はぼさぼさとしていた。

僕の様子を見るなり察したようだった。もしくは今までそういう話を父から聞いていたのだろうか。

片倉の母は目を見開き、眉間にしわを寄せて玄関においてある鍵を握りしめて、その格好のまま外に出た。

「ほら、君、来なさい、こっちに…創一は家にいなさい。分かったわね」

片倉に指を刺して僕を呼ぶ。

片倉は玄関先で立っていた。何が何だか分からないのは片倉だけだろう。

僕は片倉の母について行つた。階段を下りて、ついて行つた先は駐車場だった。そこには黒い軽自動車がある。

「ほら、乗りなさい」

僕は車に乗り込んで、車をふかせる。

「君はどこに住んでいるの？」

タバコをいったんくわえたが、しばらく静止した後、そのタバコはもとのタバコ箱に入れられた。

「…マンションです…」

「ああ、一階に噂好き大家の住んでいるマンションね…行きたくないわ」

ぼそつとつぶやくと、マニュアルを動かして車を発進させる。かなり荒い運転だった。対向車が来たらすれ違うことができないほどの狭い道を壁すれすれの運転を続けた。彼女は集中しているようで、きつとした細いまなざしで口を固く結んでいた。

僕は不思議と、片倉の母を頼もしい人に思い始めていた。

そして瞬く間にマンションの駐車場に車は止まった。

僕はシートベルトを取ってドアを開けようとしたところだった。

「君…今の生活、どう思う？」

片倉の母はフロントガラスの向こうを見ながら唐突に言った。

「今の生活って…？」

「君と…君のお父さんとの生活…お母さんいなくて…寂しくないの？」

僕は考えた。今日まで、それは満足のいくものだったと思う。生活に不都合な事だつてなかったし、不自由なく暮らしていたといえそうなる。それなりに、楽しい生活だった。しかしジグソーパズルのようにたった一つだけ欠片。それは父が隠していること。母についてのこと。何度も考えた。もしも母がいたなら、とも考えた。しかしそんなことをして結局、むなしさに終結するだけ。考えても悲しいことだった。

「いえ…寂しくないと言ったら嘘になります。だけど…今の生活で大丈夫です」

片倉の母は一度鼻をすすり、後頭部のクッションに頭をのりかからせた。

「君、強いんだね…行こうか」

彼女のその言葉はどういう意味合いを持っていたのかは分からない。しかしその言葉で勇気付けられ、信頼さえ寄せるようになったのは間違いなかった。

僕は階数を告げ、片倉の母を追いかけた。階段を上り、ひたすら

背中だけを見ていた。時々すれ違つように見える横顔が切迫していて、その緊張感が伝わった。

その目的の階数にたどり着くと、僕は部屋番号を告げた。

そして僕らはその部屋へ向かう時、片倉の母の足は突然止まって振り返った。そして僕と同じ高さになるように屈み、僕の目を見つめて言った。

「君…秀二…君。一つ聞きたいことがあるんだけど…もし…お母さんがいき…」

中途半端に言葉をやめた。視線を落として、下唇を噛んだ。何か考えているようだった。まるで何か大きなものと戦っているようで、それと戦うために決意ができないようであるようであった。

そして一度目を閉じて言い直した。

「…君はここで待つて、ね」

階段の壁に隠れるよう指示を受けて、僕は疑問を持った。ここで待つ意味はない。父に僕の意見を伝えたかった。たとえその行為が親不孝であっても、やはり僕はここに居続けたかった。

僕はこつそりと後をつけようとしたが、振り向き様にする優しい目が合ってしまうと、圧力を感じて静止せざるを得なかった。いや、違うことで止まらなければならなかったような気がした。僕はそこから一步も動けずに壁から見守ることになった。

チャームを押した。怪訝そうに咳き込む。何かつぶやいた。

ドアが開く。ドアは開いただけで、父は顔を出さなかった。

きつとした目に変わり、唇を動かす。そしてドアの向こうへ片倉の母は消えていった。

僕の見たのはここまでだった。僕はここで待つていた。いまだこの季節は寒かった。階段に座ると、石階段であるので冷たい。そして風が吹けば壁が防いでくれるも跳ね返ってくる風があった。手をこすり合わせてとにかく待つていた。

しばらくする頃合、ふと僕が耳にした不思議な音。いたそれは音だっただろうか。人の声にも聞こえた。風がさえぎっていた。その

音かもしれない。僕は耳を澄ましてみた。すると今度ははっきり聞こえる人の怒声。

まさか、と僕は立ち上がった。そして家に向かって走った。

勢いよくドアを開けようとドアノブに手をかける。そのたった一枚の板の向こうから聞こえてくる怒鳴り合いがあった。

「が勝手に出て行ったんだろ。あの子を残していつて…それで何だ。俺が何を言っても出て行たくせに、今度は引き止めるって言うのか？」

「だから違うわよ。そういうわけじゃないって言うてるじゃない。だから何で引越すことがあるって言うているのよ。関係ないじゃない、あの子らには」

父は非感情的だ。その父が火花を散らしている。そのことは驚いた。だがそれよりももっと驚いたことがあった。

今の会話で、僕はどんな存在であるのか、ということ。

「それで何？あなたは私に何をしたいの？そうやって引越して嫌がらせ？子供はまったく関係ないのよ。あなたの勝手な私事で周りを巻き込むの？そういうわけ？」

「まったく違う。何で近くにいると思うだけで苛立つような人の近くにいなきゃいけない。それにお前はあの手紙を残しただろ。もう会わないといいねってな」

「今ではそれが変わったのよ。あなたも分かるでしょ。勝手すぎるわよ。あの二人が…」

「勝手はどっちだ。勝手に出て行つたお前が言える立場か」

僕は外の寒ささえも忘れて、しばらくその二人のやり取りを聞いていた。僕は父の何で、片倉の母の何で、どの位置にいるのだろうか。それも会話から理解し始めていた。

つまり、あの人は僕のお母さんなのか。

この板一枚の向こう側で繰り広げられる、壮絶な口論。これがいつまで続くのか、父の事情、母の事情、そんなことはどうでもいい。今は僕と、片倉の位置だけが知りたい。そうすれば頭の中の乱は収

拾がつく。

二人の会話に耳を傾けも、何も考えていないでただそこに一人直立っていた。その時である。

「おい。どうしたんだ、そんなところで」

片倉だった。中の騒がしいことを気にしていた。

「なんで、ここにいるんだ」

「いや、やっぱり気になってさ。ここかな、と思って…おい、どうした」

本当にどうしたことだろう。目からまた熱いものが流れてくる。くしゃくしゃな顔をして鼻をすすった。

片倉はそんな僕を見ていて困り果てていた。

「おいおい、泣くなよ…ほら、な」

片倉になだめられて僕はようやく泣き止んだ。泣いたことで、頭の中のパニックは少し落ち着きを取り戻していた。

「だって…だって…」

「ほらほら、分かったから。中に入って止めよう、な」

片倉はこの状況を瞬時に理解しているようであった。だが僕の泣いている本当の意味を知らない。そのままこの部屋のドアを開けたのだった。

異様な光景だった。そこはまるでテレビが静止したような、音もなければ誰も動かない奇妙な光景。急なことに驚きを隠せない二人そしてこうなってしまうて用がなくなってしまうた片倉。どうしようもないほどの静寂が続いた。

この状況を見られた二人。さらに壊滅的な話を血の気たつぷりの大声で言い合っては後悔せざるをえなかった。

二人は互いに近い距離にあるのに気付いて、距離をあけた。

片倉はよくよく考えると、なぜこの二人が言い合っているのか、という理由が何なのか分からないまま突入している自分に気付いていた。

誰かが動くまで動かないような、張り詰めた状況で僕は片倉の開

けかけたドアをさらに開けた。部屋にわずかながら光が差し込まれた。

片倉の母が切り出した。

「ほら、入りなさい」そこにいると風邪を引くから」

そこから長い話をされた。

二人と僕らで向かい合わせられて、時々間に突っ込みが入れられて、二人で交互に話すようにして、正しく事細かに僕らに伝えられた。

僕らの関係は、この目の前にいる二人は僕らの両親であった。そして隣にるのが兄の創一。その経緯としては父と母は結婚して間もない頃、父がまだ小説家でなかった頃、僕らは生まれた。そして生活が忙しくなるような、二人が手を取り合い歩まなければならぬ人生で、母は出て行った。その理由はただ、シングルマザーになりたかったからだ。結婚する前から心中に抱いていたことであり、一度父に言ったそうだが父は結婚後に考えは変わるだろうと思っていた。しかし母は揺らぎもなかった。そして出産後、また母は話を切り出した。その夜、二人は大喧嘩をした。そして母は一年間考えることにした。その結果を出した次の日、保育園に預けられた僕らのうち、早く母を見て走り寄った兄を抱いて出て行った。そして家に帰るとそのことを記した手紙を見て父は保育園に急いで向かった。

驚いていたのは片倉だけ。僕の中では半ば整理がつきかけたところをただ触られただけ。ただ母に会えたことが感激極まり、それを堪えているので必死だった。今まで死んでいたと思っていた母が、適当な想像で作り上げた偶像が、それらの存在が大きく異なっており、とても嬉しかった。

だがそれに水を差すような残酷さがさらに僕の中で芽生えるのだ。母のことを忘れていたということだ。いくら幼くたって、ほんのりと憶えていなかった自分が甚だ許せなかった。父が母は死ん

だと記憶操作をしたせいでもあると思うが、やはり僕次第であることだった。

そして僕は目の前にいる両親のことを考えた。

きつと父はこの過酷な境遇に突然見舞わされて、怒るのは当然だ。勝手な見解によりこうなってしまった結果はあるものの、子供の将来を見据えた事としては、母が間違っている。だが自分の人生でそれを考えるとしたら、自分を優先に尊重するのは当然だ。自分の人生を全うしたいのは僕も同じだ。しかしそのせいで目の前にあった理想を跡形もなく壊された父の気持ちを考えれば、僕はどちらにも肩を持つことはできないなと思った。

そして父は言ったのだ。

「俺は引つ越したい。だが…もし秀二がここにいたいのなら、母さんに預ける…もちろん生活は不自由なくする」

父の許せない感情は折れることはなかった。だがこれからも折れないことだろう。

今度は母が言う。

「創一も、し…秀二といたいのなら…ついていてもいいのよ…」

二人の気持ちは痛いほど伝わった。それなのに僕らは無力だった。その言葉は単純に誘いにしか聞こえなかった。子供を尊重したいが一人は嫌だ。二人の間は亀裂。誘惑に魅力は感じられない。だが人の情けは感じる。それだけを武器に、自分だけを見てほしいと願っている。それが残酷で、情けなさを感じて、到底選ぶことなんてできない。

僕は片倉を見た。うつむいて目に入れたり入れなかったりを繰り返していた。この目の前にいるのが双子の兄に思えないのはなぜだろう。僕の心の中ではいつまで経っても仲の良い片倉だった。

何も言いそうにない雰囲気を感じた僕は、片倉は期待をできないと感じた。だから僕は言いたいことを言おうとしたのだ。

「ちよつと…時間くれないか…」

あれ、と片倉の方を見る。片倉の顔はすでに変わっていた。冷た

い目で物事を白黒付けようとするような目だった。疲労困憊で話を聞くのにも嫌な気分であると感じられた。こんな片倉を見るのは初めてだった。

「え…ええ…」

二人は声を合わせて同意した。動揺は隠せなかった。

「ほら、行くぞ」

その変化した姿に僕は圧倒されていた。

父と母を残して片倉は先行、僕の部屋に向かった。

部屋に入るなり片倉は冷たさを感じる声で言った。

「お前は どうしたい と思っ ているんだ？」

僕は正直迷っていた。本当であつたらここにいたいと思っ ている。いやそれよりもあの二人の復縁を願っ ている。だがそれが ないから迷っ ているのだ。可哀相という理由ではなく、いつも面倒を見てく れて優しい父を一人にしておけないし、だからといっ てまだ一緒に いたい片倉とも離れたくないと思っ ている。それに突然で戸惑いを 隠せなかつ た、生きていた母。それも身近にいたのだ。もう過去の ことは どうでもいい。十分といえるほど甘えたかつ た。

「僕は…」

しかし決断は下せなかつ た。たつた二択の問題がこれほど難しい ものだとは思わなかつ た。辛さと悲しさが重なつ た。もう少し考え ていたかつ た。僕は どうしたいのか分からない。何か動くものが 欲 しかつ た。

「お前は…どうなの？」

聞くのが恐かつ た。変わらず片倉の目は冷酷で僕をにらみ続 けていたからだ。

「あ、俺は…」

片倉は考えているより、無視して いた。顔色一つ変えずに歩カ ーンとした表情で いた。

「お前、何考 えているんだよ。さつきから何なんだよ」

僕はその何にも考 えていないよ うな片倉の態度にいつか怒りさ え

覚えていた。

「俺は…」

まだ同じ態度をとり続ける。それがはぐらかしているように思えた。

「ふざけんなよ。僕は真剣なんだぞ」

僕は片倉の胸を思い切り突き飛ばした。

「…何すんだよ」

片倉も僕を突き飛ばそうとする。僕はそれを予想していたのでよけることができた。そして僕は胸倉をつかみ、殴り合いになった。

「てめえ、ふざけてんのかよ。本当の親だぞ。会えたんだぞ。さつきからその目、その態度、何なんだよ。みんな、真剣なんだよ」

「お前こそふざけてんだろ。あんな親のせいで人生をぶち壊されてんだぞ。許せるわけねだろ」

「それだつたらどうすんだよ。僕らだけじゃ生きていけるわけないだろ」

「それでもだ。何で俺たちがあんな勝手な親のために真剣に考える必要があるのか？そんなわけない。真剣に考える必要なんてないんだよ。今までが俺たちを二の次にしやがったやつらがなんで親なんだよ」

僕らは自分の内に隠していた感情を互いにぶちまけて、殴り合つて、泣きじゃくつて、大盛大に部屋をめちゃくちやにした。机の上にあるものが落ちて壊れるわ、ベッドのシーツは破けるわ、カーテンはがされるわ、ついに僕らは上半身裸にまでなった。

部屋の外から声が聞こえたがそんなの構わない。

「てめえ、あんな親のこと考えていられるか？俺たちなんか結局どうでもいいんだよ、あいつらにとつてはな」

「違うんだよ。僕は」

思い思いにぶつけ合う罵倒に罵声。そして僕はやっと会えた母のこと、今まで優しさを与え続けた父のこと、その思いを声にして片倉に浴びせてやった。

次の瞬間、父と母が飛び込み、あっという間にこの喧嘩は鎮圧した。ただ残るのはめちゃくちゃになった部屋と、あざになるであろう生々しい傷跡だった。

僕はまだ息を荒くして興奮していた。まだ殴り足りない。もっとやらせる。手を握りしめて捕まえられている腕を振りほどこうとする。

しかし腕は動かなかった。がっちりつかまれていた。

「離せよ。こいつに根性を叩きなおしてやる」

「ふざけんじゃねえ。それはこっちの台詞だ」

わめき、騒ぎ、まるで犬のように吠えていた。この時はもうすでに目的がまったく違うことに僕らは気が付いていなかった。ただ目の前のやつを思う存分に殴りたかっただけだ。

その頃、二人を制止しようと必死な両親は自分を省みることになっていた。目の前の光景が心を開かせていた。

その空間にいた誰もが疲れ果たした時、もうすでに夕暮れを迎えていた。部屋に差す光のそのほの暗さに誰もが心を落ち着かざるをえなかった。今まで何をやっていたのだろう。また今日までを再び省みる機会を作った。

この部屋のあちこちに互いにいたい場所に散り、自分を思い起こしていた。

まさか今日の朝、夜にこんなことをやるとは予測もしていなかった。

僕は今までの人生、家族のこと、自分の今までの哲学、運命について、この街に着てからのこと、今までの理想、そして僕らの未来のこと、これからのことを考えていた。僕は今回の機会により、穴を埋める作業ができた。そしてその作業を終えると後から募る、切なさや悲しさ、最後にこの上ない幸福も感じられた。僕はこんなことを考えていられることが嬉しかった。家族を思うことがこの上ない開放感を、そして僕の正しい位置が導き出された。

僕はいつの間にか寝ていた。僕の部屋、シーツがないベッドの上

で横になっていた。

次の日の朝、いつの間にか母と片倉はいなかった。父と母は夜に話し合い、とりあえず今の段階としてはしほの休戦を考えていた。だがうまくはいかなかった。結局、引越すことになってしまった。人間なんてそんなものなのもう十二分に理解している。

その引越しの日までは学校に行った。片倉ももちろんいる。僕らは話すことはできなかった。互いにくだらな意地で背中合わせのままだった。

それなのに僕はたった一言だけを言いたかった。悪かった、と。しかしそういう時に限って皮肉にも事は潤滑に進んでしまうものだ。その日になってしまつて、またここに来た時と同じ業者に同じように家具類を積まれる。

僕は父と行くことにした。もともと母のことを知らなければこうやって父についていくことだし、それにこれも何かの運命だと思つた。もしもここから逃げたらこの人生、台無しになるような気がした。もう自分のために生きる人生を求めることにした。

僕は父と車に乗り込んで、この町を惜しんで外を見回した。いや、惜しんでいるより、何かを期待していた。もしも期待通りになれば、僕はしたいことをする。心に決めて昨日は寝た。しかしそれもできないのか。

引越し業者の仕事は終わつて、ついに車は発車された。

こうなるのだつたら自分で家に行けばよかった。だがそんな勇氣はなかったから今まで、ここまで胸に抱いたままだった。だけど、もしかしたら今から父に言えば、つれていつてくれるかもしれない。切り出してみよう。

しかしどうしても声が出なかった。口は開くのだが、その後の大事なことができない。

僕は座りなおして、町を名残惜しくも心にしまうことにした。ああ、そろそろこの町を出るんだな。ここに戻つてくることはできるだろうか。ここにまた来る機会があるだろうか。もしかして、永遠

にこの土地を踏まないかもしれない。

すると心臓がヒモで絞まれた。胸が痛かった。この車に乗って次の土地に行くまで、この状態のままにいるのだろうか。これでいいのだろうか。これで。

開いた窓から風が吹き込んでくる。その時だった。ここでの思い出が脳裏によぎる、決定的なものが耳にすつと入ってきた。耳を澄ましてみる。

「…じー」

それが遠くに聞こえた。はるか遠く。そしてさらに遠く。山びこのように頭の中でこだまする。

赤信号で車が止まった。

「秀二」

その声ははつきり聞こえた。僕は窓から身を乗り出した。

父は驚き、どうした、早く戻りなさいと言った。

「秀二」

それは確かに片倉、いや兄の創一を目にした。創一は走っていた。この赤信号で追いつこうとしていた。

「僕、言いたいことが…」

「元気だなー」

創一は自分のことでいっぱいだったらしい。顎は上がって、声はカラカラ、汗は髪の毛を濡らしていた。

僕は車に戻った。もしものために前に書いた手紙。これを渡そうと努力だけで実りはしなかったから足元の自分のバッグにある。それを取り出して僕は再び身を乗り出した。

「これー。読んでー」

「あ…？何だつてー？」

僕は兄の都合をよそにその手紙を高くかざし、それを道に捨てた。そして一言、思い切り叫んだ。

「かた…兄さん。またねー」

「あー？何だつてー？」

周りは車で溢れていた。互いにエンジンをふかし、その声は届いたか分らない。

僕は車に戻った。

「いいのか…？」

父の言葉に僕はうなずいた。

「…行つて。もう一回会つと…もうダメな気がするから…」
青信号に変わった。

父は苦い顔でアクセルを踏むのを恐れていた。しかし僕の行つての一言でついに車は発進された。

僕はバックミラーでしか見なかった。

兄は後方にいるも、すぐそこにいたのだ。そしてその縮まった距離もむなしく、どんどん突き放される。どんどん遠くに。そしてまた遠くに。小さくなって、やがてカーブでその姿は認められなくなった。

バックミラーは必要がなくなった。

僕は座りなおして、ここに来た時と同様の道を通っていたので、過ぎ行く森林を眺めていた。きれいだな。そんな単純な心境でここに来ていた時のことを思い出した。あの頃は確か、ここに来た時はすべてがまぶしくて、それらが宝物だったが、今ではそれも箱にしまわなければならなくなった。またいつかあける機会が訪れることだけを祈るばかりだった。

そして僕はふと、トンネルに入る前にもう一度バックミラーを見た。

ふつと揺らいで見える一つの影の口がまた会おうぜと言っていた。

「これはいくらかな…百五十ではどうか？」

「ん…そうですね…そういえば最近、美術雑誌にも取り上げられますます注目を浴びて人気も出ているようです。ですがこの頃に描

いた絵は限りなく希少でありますし…」

「では百八十ではどうかな？」

「二百五十」

「…二百五十？」

「…そうそう。これに二百二十万を付けてくれる人が昨日お越しになられました…少し考えましたが、やはり今日のためにとつておいたのです。それでもし…」

「二百三十」

「二百四十五」

「…二百三十五。これ以上は出せん」

「現金払いなら少しは安くして…二百四十…いえ二百三十八なら」

「…いいだろう。用意させよう」

絵を見ていた二人の会談は終わった。その後、黒服が持ってきたアタッシュケースに入った現金を確認して、握手を交わしその場を後にした。

「おいおい。またやったな。今回はどうだったよ」

「まあ、まずまずでしょう。けどまた株を上げたな、お前。一年前まではあれはせいぜい三万がいいところだったのにな」

「ははは…お前がいるからだよ。こうやって絵にだけに熱中できる。俺は画家、お前は商人。いい職業があるもんだ…」

「まったくだ…ま、今後も宜しくな」

「ああ…これからもな」

後編（後書き）

これからの参考になりたいと思いますので、良かったら感想をお願いします。よりよい作品作りにご協力ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4149g/>

TWIST～キミと歩く道～

2010年10月8日15時58分発行